九州産業大学美術館
Museum of
Kyushu Sangyo University

KSU
九州産業大学
KYUSHU SANGYO UNIVERSITY

文化庁
Agency for Cultural Affairs, Government of Japan

令和5(2023)年度文化庁「大学における文化芸術推進事業」
「2042年問題」解決に向けた社会資源を活用した「健康寿命」増進プログラム開発とリンクワーカー人材育成事業実行委員会
編集:緒方 泉(委員長・九州産業大学地域共創学部教授)
デザイン:小野 勝也(有限会社 フォース)
発行日:2024年2月29日
印刷:東洋紙業高速印刷株式会社

博物館が、人々を支える。

MuseuM

令和5年度 文化庁「大学における文化芸術推進事業」
実施報告書

「2042年問題」解決に向けた社会資源を活用した「健康寿命」増進プログラム開発とリンクワーカー人材育成事業実行委員会
(九州産業大学美術館<代表>、九州大学総合研究博物館、福岡市博物館、福岡市美術館、海の中道海洋生態科学館、田川市石炭・歴史博物館、直方谷尾美術館)

本事業のねらい・趣旨

カナダ、ベルギーなどの医療保険制度では、医療従事者（主に医師）が地域のリンクワーカーを介して、患者へ適した博物館が行う教育プログラムへの参加を薬と同じように「処方」している。また、英国のNHS＝国民保健サービスはロンドン大学と共同し、文化芸術を活用したメンタルヘルスプログラムを地域住民へ提供している。ところで、日本では団塊世代が75歳以上になる「2025年問題」に続き、団塊ジュニア世代が全て高齢者になる「2042年問題」が浮上し、社会保障費の増大、勤労世代の減少が大きな課題である。

そこで、本事業では、英国や米国などの事例調査をもとに、地域住民（乳幼児から高齢者）の「健康寿命」増進に向けた博物館浴*プログラム開発、そして医療・福祉従事者と地域住民、博物館などをつなぐリンクワーカー人材育成を目指すことで、「2042年問題」解決に向けた社会資源の新たな活用方策＝社会的処方の場となる「博物館健康ステーション」の運用、さらに博物館浴による地域医療の新たな枠組みを提案したい。なお、これまで3ヶ年の事業推進により、700名以上の地域のリンクワーカー人材を育成している。

1

＊博物館浴＝博物館見学を通して、博物館の持つ癒し効果を人々の健康増進・疾病予防に活用する活動

本事業の実施概要

1. 博物館を活用した「健康寿命」増進プログラム開発講座（博物館などの社会資源を活用した、回想法、園芸療法、音楽療法などの「健康寿命」プログラムの体験、そして企画立案・実施運営の方法を学ぶ講座）
2. 博物館リンクワーカー人材養成講座（博物館などが社会的処方の場となるための理論と実践を学ぶオンライン講座）
3. 博物館のリラックス効果に関する実態調査（リンクワーカーがつないだプログラム参加者への生理測定、心理測定による効果評価を定量的・定性的に調査。対象は児童生徒から高齢者まで幅広い世代とする）
4. 博物館健康ステーションの開設（地域住民を対象に、全国のリンクワーカーが企画立案する博物館浴プログラムを提供する、ミュージアムカフェを開催し、地域博物館における居場所づくりを進める。合わせて、居場所の効果を定量的・定性的に調査する）
5. 海外博物館、美術館などにおける「健康寿命」増進プログラム及びリンクワーカーの実態調査（海外の先進事例を調査し、特に事例の定量的・定性的な評価方法を課題とし、今後の方策を検討する）
6. 海外の博物館関係者、リンクワーカーを招聘したオンライン国際シンポジウムの実施（海外事例紹介、及び情報交流の場とする）
7. 本事業を紹介する多言語映像資料の制作（海外博物館、美術館などに向け、社会資源活用の成果を公開する）
8. 3ヵ年の事業成果をまとめた報告書の作成（「2042年問題」解決に向けた社会資源を活用した、「健康寿命」増進プログラム開発とリンクワーカー人材育成事業の総括報告を国内外に公開する）
9. 実行委員会の開催（3部会を設ける。①調査研究部会②プログラム開発・評価検討部会③教材開発部会）

2

本事業による人材育成の目標

本事業の目的は、博物館を社会的処方の場とし、「薬」だけに頼らない地域医療の構築を目指すことである。そのためには、「健康寿命」増進プログラム開発と医療・福祉従事者と地域住民、そして博物館をつなぐリンクワーカー人材育成が鍵となる。こうした人材の育成は、地域に社会的処方の場としての博物館を増やすと同時に、リンクワーカー自身の健康寿命増進に結びつくことも期待できる。さらにリンクワーカーの活動領域が博物館に留まらず、地域の学校や公民館、図書館、保健所等多様な社会資源に拡大することも期待できる。

3

本事業の社会的な役割、効果

本事業の社会的な役割は、全国の博物館・美術館等と福祉・医療機関との連携から、「2025年問題」「2042年問題」を抱える我が国の地域包括ケアシステム実現に向けた「博物館健康ステーション」の構築にある。「博物館健康ステーション」の構築は、「地域の通いの場」として、博物館が新たな価値創造の実現につながり、高齢者の社会保障費増大の歯止めはもちろん、児童生徒をはじめとした地域住民のメンタルヘルス支援への効果が期待できる。それは、博物館浴の定量的評価の確立から、「博物館と健康」という新たな医療ビジネス、「文化芸術で稼ぐ」方策研究につながる効果も期待できる。

4

組織体制

実行委員会名簿

委員長	緒方　泉	（九州産業大学地域共創学部・教授）
副委員長	三島美佐子	（九州大学総合研究博物館・教授）
委員	朝烏　和美	（田川市石炭・歴史博物館・学芸員）
委員	市川　靖子	（直方谷尾美術館・学芸員）
委員	髙田　瑠美	（福岡市美術館・学芸課教育普及係長）
委員	松村　利規	（福岡市博物館・学芸課長）
委員	塚田　仁次	（海の中道海洋生態科学館・運営本部展示部海洋動物課係長）

事務局名簿

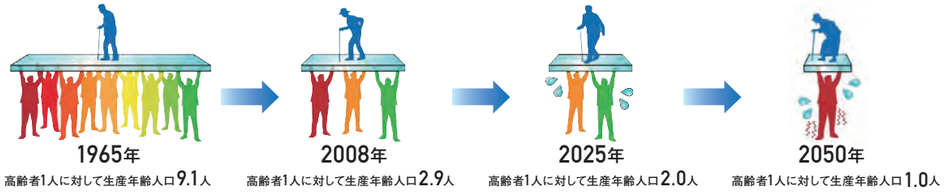
事務局長	中込　潤	（九州産業大学美術館・学芸室長）
事務局次長	永井　浩一	（九州産業大学産学連携支援室・部長）
事務局員	織田　珠未	（九州産業大学産学連携支援室・室員）
事務局員	吉田　公子	（九州産業大学美術館・准教授）
事務局員	福間　加容	（九州産業大学美術館・学芸員）
事務局員	土屋　和美	（九州産業大学美術館・学芸員）
事務局員	四ヶ所　悦子	（九州産業大学産学連携支援室・室員）

5

「2042年問題」解決に向けた社会資源を活用した「健康寿命」増進プログラム開発と社会的処方の場となる「博物館健康ステーション」の運用構想図

背景

厚生労働省発表のデータより算出

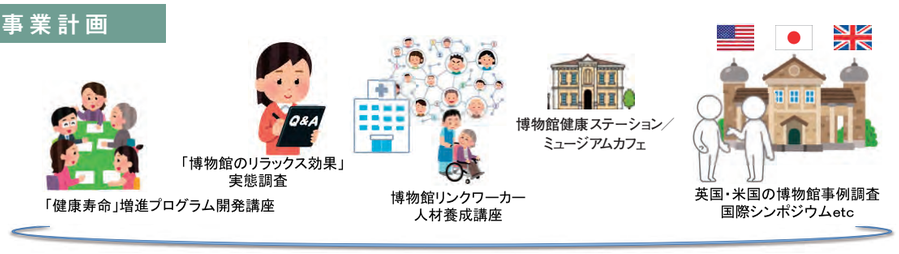


2042年問題=高齢者人口がピークになる…
社会保障費の増大、勤労世代の減少が大きな課題

本事業の概要

① 博物館などの社会資源を活用した高齢者の「健康寿命」増進プログラム開発
② 病院、医療従事者と高齢者、博物館などをつなぐ「リンクワーカー」人材育成

事業計画



大学・博物館・医療・福祉が協働する
「博物館健康ステーション」の運用、地域の高齢者医療の新たな枠組みを構築

博物館を活用した「健康寿命」増進プログラム開発講座

プログラム開発コース

「博物館を活用した「健康寿命」増進プログラム開発のための学芸員研修会」という名称で開催

【開催趣旨】

2023年4月1日付けで、1952年の施行から70年が経過した「博物館法」の一部が改正された。

今回の研修会で注目したいのは、第3条第3項である。

「（前略）地域における教育、学術及び文化の振興、文化観光その他の活動の推進を図り、もって地域の活力の向上に寄与するよう努めるものとする」と規定するうち、「その他の活動」には、まちづくり、福祉分野における取組、地元の産業の振興、国際交流等の多様な活動を含み、「地域の活力の向上」には、地域のまちづくりや産業の活性化に加え、コミュニティの衰退や孤立化等の社会包摂に係る課題、人口減少・過疎化・高齢化、環境問題等の地域が抱える様々な課題を解決することを含むこと、と「留意事項」で詳しく説明している。

中でも、「その他の活動」に示される、福祉分野の取組や「地域の活力の向上」のコミュニティの衰退や孤立化等の社会包摂に係る課題、人口減少・過疎化・高齢化問題は、日本が抱える「2025年問題（団塊の世代が75歳以上になる）」「2042年問題（65歳以上の高齢者人口がピークを迎える）」への対応と相まって、地域博物館の新たな価値創造を考える上で、重要な箇所と言える。

そこで、本事業では、今後社会的処方の場となることが期待される博物館を活用した、「健康寿命」増進プログラム開発の企画立案・実施運営の方法を学ぶ研修会を開催する。

カナダでは、「処方箋に博物館と書く」という新たな医療保険制度が始まっている。「知的刺激/学び/楽しみの場」である博物館が、「リラックス効果の場＝博物館浴の場」という新たな価値創造が可能になる「健康増進プログラム」を開発することで、地域の高齢者医療にどのように貢献できるかを、参加する学芸員が考える機会を提供したい。

研修会チラシの表と裏

6

表面

裏面

「博物館 de 回想法」 ①

■ 講 師
市橋 芳則（北名古屋市歴史民俗資料館専門幹）
専門分野：博物館学

■ 講師から一言
回想法は、高齢者を元気にし、世代間交流を促すプロジェクトとして活用されています。博物館と高齢者ケア・認知症予防・健康増進などを推進する福祉関係の部局とが連携を図った「思い出ふれあい（回想法）事業」を2002年から実践しています。私たちは、これを「博福連携」と名付け、地域活動の軸の一つとしています。

■ 開催日時
2023年7月28日（金）10:00～17:00（9:30～受付開始）

■ 開催場所
九州国立博物館（福岡県太宰府市石坂4-7-2）

■ 内 容
◉ 午前
09:30 受付開始、10:00 開会挨拶、見学前の心理・生理測定、10:25 講師紹介、参加者自己紹介、10:40 休憩、10:45 展示室見学（個人鑑賞）、11:35 見学後の心理・生理測定、11:55 休憩、12:00 講義❶「回想法と北名古屋市歴史民俗資料館のこれまでの取り組み」、12:40 昼食
◉ 午後
13:30 講義❷「回想法と北名古屋市歴史民俗資料館のこれまでの取り組み」、14:40 休憩、14:45 グループ討議、15:00 展示室へ移動、グループで鑑賞、15:45 休憩、16:00 グループ討議、16:30 ふりかえり、16:50 講評、17:00 終了、解散

■ 受講者数
25名（福岡19名、長崎1名、山口4名、愛知1名）

■ 事後アンケート

質問1
市橋先生の講義や「回想法スクール、いきいき隊」の映像で、印象に残っていること、興味深かったことをお書きください。

❶ 博物館の新たな役割の一つとして、「第三の居場所」と言われていることが、個人的には大変興味深く感じました。自宅の近くにある公園は、ボール遊びの全てに対して、禁止の看板が立っています。公園の隅の方で遊んでいる子どもたちを見かけるととても胸が苦しくなります。
子どもたちや、福祉的配慮が必要な方々、すべての方を受け入れる包摂的な場所として、博物館が、日常に溶け込む日が来ることを、「第三の居場所」として当たり前の光景が見られることを、願っています。
実際に、博物館の講義室を時間は決めてではありますが、開放している博物館も住んでいる隣町にあります。じわじわではありますが、浸透していってほしいと思います。

❷ 施設の中で、レクリエーションを提供できる時間は限られています。しかし、利用者間でコミュニケーションが進んでいけば、認知症進行の予防にもなり、QOLの向上にも寄与できるのではないかと考える機会になりました。いきいき隊の事例と同様に、最初のうちは他者と話すテーマが浮かびにくいと感じるため、最初の話題作りがスムーズに行えると、その後はお互いに会話の掘り下げを行えるようになるのではないかと思います。

❸「回想法スクール」の卒業後も、「いきいき隊」として自主活動されていることが印象深かったです。人・社会との繋がりが継続されており、そのような場があることが重要だと思いました。

講義風景（市橋先生）

見学風景

質問2
九州国立博物館の第3室、第4室での「個人鑑賞、グループ鑑賞」を経て、「考古資料を観察し、思いを巡らせる鑑賞体験の語り合い」の感想などをお書きください。
また、考古資料を活用した新たな回想法プログラムがあれば、お書きください。

❶ 埴輪一つとっても、一人ひとり埴輪に対する思いが全く違うことを知り、グループワークの面白さを体感しました。私は埴輪をありがたいもの（人の代わりになってくれた）と思っていたのですが、怖いと思う方がグループ内に二人もいて衝撃でした。理由を聞くと、どちらもなるほどと納得できて、埴輪に対する捉え方が増えました。

❷ 子ども時代にテレビや漫画で目にした考古的なものが、回想法につながるのではないかと、グループで話し合いが進みました。グループみんなで「このアニメは？」「あのアニメは？」「あの漫画は？」など、色々意見が飛び交いました。
最近のアニメになりますが、鬼滅の刃の「刀鍛冶の里編」に、刀を作るシーンが出てくるのですが、ちょうど、文化交流展示室の第3室を回った時に、全員で刀を打っていたであろう鉄の塊と、刀を挟む道具（火箸か）の展示を見ていました。
「これは！！」回想法のプログラムに繋がるのではないか！！
「子ども時代に見たアニメに移り込んでいる考古的資料が、回想法につながる」という、大きな期待が持てた有意義な時間となりました。
今また考えますと、アニメに限らず、映画や本や大河ドラマなどなど。みんなで話し合えば話し合うだけ、考古資料と回想法は繋げられそうな気がします。

❸ 他人の感想を聞きながら、考古資料を鑑賞することは楽しいと感じました。日本の美術館や博物館では静かに作品鑑賞をすることを求められますが、海外の博物館に行った際には、観覧者のグループが声を出して感想を言い合っている場によく遭遇し、観覧者たちの感想が聞こえてきて思わず心のなかで突っ込みを入れてしまうことが時々あります。今回は、とても楽しく、また気軽な気持ちで鑑賞できました。今回の経験から、やはり美術館や博物館は声に出して、感想を言い合いながら作品を見たいと改めて思い、日本もそれが受け入れられる文化になれば嬉しいと感じました。

質問3
仲間とともに過ごした時間（コミュニケーションから生まれた新たな気づきなど）について、感想をお書きください。

❶ 同じものを見ても、受け取り方は本当に人それぞれ。おもしろい。さまざまな人の意見を交流させると、今まで見えていたものと違う捉え方ができるし、意見を出し合って、新しいものを生み出せると実感できました。

❷ いろんな施設の人がいて、それぞれ専門もちがうので、多面的な方向からアイデアが出せたのがよかったです。他館、他施設の人と会えるのがこの研修の楽しみの一つです。今回もいろんな人と出会えてよかったです。

❸ 感情でとらえる方と理性でとらえる方と相反する人たちが同チームにいて、面白かったです。どうしてもバックグラウンドを持っている状態で見てしまう人を、持っていない人がブチ壊していく感じが、まとまりがないようで、バランスがとれていてよかったです。

質問4
今回学んだことを、今後の学芸員活動、博物館活動でどのように活かしていきたいですか？

❶ 一番の学びは、意見交換の楽しさ、面白さです。学芸員として活動できるかは、分からない立場ですが、学芸員や福祉の分野で活躍されている方々との今回の交流は、これからの人生に確かな変化をもたらしてくれると感じています。
「博福連携」という言葉が好きです。今後も福祉分野で、支援が必要な方々の傍で学ばせていただきながら、これからも何らかの形で大好きな博物館と関わっていきたいと思います。

❷ 博物館活動で修学旅行団体を案内する時、時間が押しているからといってまとめて説明しがちです。しかし、もう少し生徒が考古遺物から実生活に結び付けて考える時間を取り、より印象に残るように説明を工夫しようと思います。

❸ 回想法や懐かしさを感じられるレクリエーションを実施したいと考える時に、「昭和といったらこうだ」というようなステレオタイプな感覚は持たずにいたいと思います。多様なテーマから、回想は起こしていけるものだと今回の研修で学びました。

❹「回想法」とは、作品を鑑賞し、そこから生まれる感想や感情を、他人と共有することでも成立する、ということを今回学びました。よって、「考古資料」でも「回想法」は可能であり、博物館を楽しい場所とするには、個人の感想や意見がとても大切なのだと感じました。

「博物館 de 回想法」 ②

■ **講 師**
市橋 芳則（北名古屋市歴史民俗資料館専門幹）
専門分野：博物館学

■ **講師から一言**
前掲のとおり

■ **開催日時**
2023年9月8日（金）10:00～17:00（9:30～受付開始）

■ **開催場所**
宮崎県総合博物館（宮崎県宮崎市神宮2-4-4）

■ **内 容**
◉ 午前
09:30 受付開始、10:00 開会挨拶、見学前の心理・生理測定、10:25 講師紹介、参加者自己紹介、10:40 休憩、10:45 展示室見学（個人鑑賞）、11:35 見学後の心理・生理測定、11:55 休憩、12:00 講義 ❶「回想法と北名古屋市歴史民俗資料館のこれまでの取り組み」、12:40 昼食
◉ 午後
13:30 講義 ❷「回想法と北名古屋市歴史民俗資料館のこれまでの取り組み」、14:40 休憩、14:45 グループ討議、15:00 展示室へ移動、グループで鑑賞、15:45 休憩、16:00 グループ討議、16:30 ふりかえり、16:50 講評、17:00 終了、解散

■ **受講者数**
16名（福岡2名、宮崎13名、愛知1名）

■ 事後アンケート

質問1
市橋先生の講義や「回想法スクール、いきいき隊」の映像で、印象に残っていること、興味深かったことをお書きください。

❶ 回想法スクールを体験された方が、今度はいきいき隊として自主活動を行い、自らが回想法のリーダー役として回想法を広めたり、地域貢献をされていたりしていました。そういったつながりが増えていくことで、地域の方々や生き生き隊として活動するご自身の生きがいとなり、健康寿命アップにつながっていくと感じました。

❷ 市橋先生の展覧会のネーミングセンスに圧倒されました！有名な展示品でなくとも、展覧会名で来館したくなる技術、見習いたいです。予算がなくても、企画展ごとの予算を恒久的な部分へシフトさせるテクニックも、「なるほど！」と思いました。

❸ 回想法スクールといきいき隊は、どの地域でも実践できることだと感じました。本町でも、健康運動や認知症を知るためのワークショップは実施されていますが、回想法については知られていません。
そして、活用しきれていない建物もたくさんあります。ただ、内容としては、博物館・資料館のほうが向いているのかなとは思いました。もちろん、美術館でもアート回想法という方法を知りましたので、高齢者がグループで来館されるときには単なる鑑賞だけでなく+回想法という工夫は、今後積極的に取り組んでいきたいと思います。

講義風景（市橋先生）

グループワーク

質問2
宮崎県総合博物館での「個人鑑賞、グループ鑑賞」を経て、「民俗資料を観察し、思いを巡らせる鑑賞体験の語り合い」の感想などをお書きください。また、博物館資料を活用した新たな回想法プログラムがあれば、お書きください。

❶ 個人鑑賞で気に留めなかった民俗資料を、グループ鑑賞で他の方に紹介や説明してもらうと、その民俗資料の見方が変わりました。新たな回想法プログラムとしては、年齢のまったく違う世代間で展示してある資料を紹介することを考えました。高齢の世代は、展示資料を実際に使っていた経験を話し、若い世代は展示してある資料をどう感じるのかを話すことで、お互いが今まで自身が感じなかったことを感じ、モノの見方が変わるのではないかと思いました。

❷ 懐かしいモノは、年齢、趣味、育った地域など、その人のもつ背景によって違ってくるため、グループ鑑賞は思いもかけない発見や納得がありました。個人で見ても自分の枠の中だけに留まってしまうものが、グループで語り合うことで、知らない過去の世界をイメージすることができ、とても楽しい時間でした。それは新しいプログラムを作っていくうえで必須だと感じました。
今後の博物館での回想プログラムでは、今回の「個人鑑賞とグループ鑑賞」を入れて、語り合いの時間をとると楽しさが増すのではないかと思います。

❸ 民俗資料を観察した際、懐かしさと同時に祖父のことを思い出しました。個人・グループ鑑賞と2回観察しましたが、この時間がすごく安らぐひと時だったように思います。

質問3
仲間とともに過ごした時間（コミュニケーションから生まれた新たな気づきなど）について、感想をお書きください。

❶ 福祉関係以外の異業種の方々とお話しする機会ができ、様々なヒントをもらうことができたとともに、連携することで今後の部門に関する資料調査にも大きな結果を生むと思いました。回想法だからといって、福祉関係だけにとらわれない大切さを感じました。

❷ 仲間と同じものを見て、語り合い、時代や思いを共有することは緊張もほぐれ、心地よく、気持ちが前向きになると感じました。初めての方々であっても、語り合う相手がいるということは、とても大切なことだと気づきました。楽しさを共有することでチームワーク力が高まり、アイデアが湧き、ディスカッションしながら行動に移すことができるのだと思います。仲間がいなければ成り立たないことばかり、仲間と繋がることの重要性を今回も感じました。

❸ 今回、博物館関係だけでなく、様々な職業の方と一緒に研修を受けることができました。特に、葬儀社やスーパーなどで健康体操や回想法に取り組んでいるという話は、とても新鮮でした。当館のアウトリーチというと、学校や文化施設が主ですが、もっと生活に根付いた場所にアウトリーチしていくことも大事だと思いました。

質問4
今回学んだことを、今後の学芸員活動、博物館活動でどのように活かしていきたいですか？

❶ 本町でも、町民の高齢化は進んでおり、高齢者の健康寿命を延ばす、文化の力が医療費軽減に一役担うことができる、という認識は高まってきています。「回想法とは何か」を具体的に学べましたので、様々な普及事業のなかで、これに回想法の要素を入れられないかな？と考えていきたいと思います。

❷ 総合博物館の解説員による、回想法のファシリテーションのノウハウ（声のかけ方、触れる資料や写真パネル、参加人数など）は、高齢者の方の対応の際に取り入れていきたいと思いました。

❸ 企画展の中で、昔の写真や動画を取り入れられる部分があれば取り入れていきたいと思いました。少子高齢化の時代ですので、孫と祖父母・3世代で楽しめる施設を目指していければと思いました。

6-2

「博物館・美術館de園芸療法」③

■ 講 師
岩崎 寛（千葉大学大学院園芸学研究院教授）
専門分野：環境健康学

■ 講師から一言
園芸療法とは、植物の栽培といった一般的な園芸活動だけでなく、植物を用いたクラフトや庭園の散歩など、身近な植物を五感で感じることで、ストレス緩和や、落ち込み・不安などの感情を改善するものです。本講座では、園芸療法の事例を紹介しながら、その効果や身近な実践方法についてお話します。

■ 開催日時
2023年9月25日（月）10:00～17:00（9:30～受付開始）

■ 開催場所
大分香りの博物館（大分県別府市北石垣48-1）

■ 内 容
◉ 午前
09:30 受付開始、10:00 開会あいさつ、講師挨拶、生理・心理測定方法説明、参加者の了解をとる。
10:15 測定1（血圧、脈拍、POMS）、10:30 移動、1階ハーブガーデンで、岩崎先生の解説を聞きながら散策、10:55 移動、展示室へ、11:05 展示解説、アロマタイム、11;35 移動、3階研修会場へ、11:40 測定2（血圧、脈拍、POMS）、11:55 昼食
◉ 午後
12:50 参加者自己紹介、13:00 講義「植物のセラピー効果を地域ケアに活かす」、14:30 休憩、14:45 演習 ❶「調香体験プログラム」、15:15 休憩、15:25 演習 ❷「色々な豆を使った豆チャームづくり」、16:05 休憩、16:15 質疑応答、16:35 ふりかえり、16:50 講評、17:00 終了、解散

■ 受講者数
14名（福岡3名、大分6名、宮崎1名、山口2名、千葉1名、北海道1名）

■ 事後アンケート

質問1
岩崎先生の講義を聞いて、印象に残っている事、興味深かった事をお書きください。

❶岩崎先生の講義では、緑は視界に収めるだけで効能があり、高速道路のサービスエリアではわざわざ緑地エリアまで行く人が少ないから、動線上に緑を配置することで、自然とリラクゼーション効果を引き出すゼロ次予防デザインが特に印象に残っています。

❷園芸療法が、回想法やリウマチ患者のリハビリ、ガン患者の緩和ケア、特別支援学校や被災地支援など医療や福祉、教育の様々な現場で実際に役立てられていることを知り、大変興味深かったです。特に印象に残ったのは、訪問園芸や出前園芸の実践例で、園芸を介して地域の高齢者と若者が触れ合う機会を作ったり、園芸の体験を病気の予防や健康チェックにつなげたりという試みでした。

❸特別支援学校における園芸の導入に、当初は教員が否定的だったにもかかわらず、岩崎先生が強い意志をもって交渉を続け、結果を示しただけでなく、教員の気持ちを180度変えてしまったということがとても印象的でした。その他の交渉事もですが、先生の意志を曲げずに突き進もうとされる姿勢に、ちょっとダメでもあきらめないことの大切さを学ばせていただきました。

質問2
ワークショップ「調香体験」「豆チャームづくり」を通して、気づいたことをお書きください。

講義風景（岩崎先生）

調香体験プログラム

❶自分の好きな香りや好きな色、形を集めて何かを作る行為を通して、自分を表現することの楽しさもあり、意外な自分を知るきっかけにもなると思いました。調香体験では、頭の中で好きだと思っていた香りと実際に好きと感じる香りが違っていたのが面白かったです。また、香りを嗅いだり、植物に触れたりと、五感を使った体験は心理的にも解放された気がします。

❷自分で選び、調合する（詰め込む）というのは、一見すると楽しく作業しているだけにも見えますが、あとから考えると、とても学びになっていると感じました。その場で、というよりも、持ち帰ったあとで今日作ったものがどんな香り（モノ）だったのかを改めて調べ、それにつながるものや共通するものについても知りたくなっていました。自分で考え、手を動かし、作るということは、そのモノに対する、より強い興味を示すきっかけとなるのだと、今回のワークショップを通して気がつくことができました。

質問3
岩崎先生と一緒に、ガーデンを散策した時に、先生のお話から気づいたこと、今までと違った散策体験などをお書きください。

❶私たち参加者、そしてガーデン利用者に寄り添ったアドバイスをされていたことが、とても心に残りました。バリアフリーの視点も含め、ここを訪れる人にどういう体験をしてほしいか、どういうことを楽しんでもらいたいかということを考えて空間作りをすることの重要性を考えさせられました。何かを作ることの原点を改めて教えていただいたと思います。中でも植物を図鑑的にみせるよりも、もっと自然な姿を楽しんでもらうほうがいいというようなことをおっしゃったのが印象に残っています。

❷「人は興味がさほどないと、しゃがんでまでは触ろうとしない」ということが、目から鱗が落ちるような衝撃を受けました。確かに、興味がないものに関しては、手を伸ばして届く範囲でしか触っていなかったかもしれない。むしろ、興味のあるものや気になるものは、どんなに低いところや見にくい箇所であっても、触らないにしても、細かなところまで見ようと顔を近づけている自分の姿を思い出しました。

質問4
今回学んだことを、今後の学芸員活動でどのように活かしていきたいですか？

❶私は美術館で教育普及の仕事に携わっていますが、岩崎先生のお話を聞いていると、美術館の活動にも重なる部分が多くあるなという感想を持ちました。美術の分野でもアートセラピーや回想法などが実践されていますし、対話型鑑賞やワークショップは自己表現や他者とのコミュニケーションを促す機会にもなります。当館でも近年ではそうした視点に立って、高齢者向けのプログラムや子ども・子育て世代の方々に向けた催しを行っており、岩崎先生が実践されているさまざまな取り組みは、活動を続けていく上で参考になることが多くありました。岩崎先生の講座を受けて、美術館の活動においても美術への理解や学びといった視点だけでなく、心のケアや子どもの成長といった側面もよりいっそう意識して活動を考えていく必要があると感じました。また、数値化されたデータによって、実践の効果を検証することの重要性も改めて認識させられました。美術館のワークショップやアウトリーチプログラムで行うアンケートの内容や分析方法なども再考の余地があるでしょうし、美術の療法などの実例も参照してみたいと思います。
園芸療法そのものについては、美術館でも植物を扱ったワークショップを行なったことはあるものの、直接的に園芸療法と結びつけたことはなかったので、園芸療法を取り入れたワークショップもやってみたいと思いました。

❷今回は視覚と嗅覚と触覚を使ったワークショップもあり、当館での取り組みとの親和性の高い内容のように感じました。また、当館に隣接する史跡公園には、古代にもあった樹木もたくさん植えられています。岩崎先生のお話にあったゼロ次予防や公園を利用した市民との連携もできると思いました。さらには、史跡公園にある樹木に関する分布マップなどを制作していけば、もっと博物館と公園をつないでいくことも可能だと考えています。今回の研修会では本当にたくさんのヒントをいただくことができました。

6-3

「博物館・美術館de園芸療法」④

■ **講 師**
岩崎 寛（千葉大学大学院園芸学研究院教授）
専門分野：環境健康学

■ **講師から一言**
前掲のとおり

■ **開催日時**
2023年10月27日（金）10:00～17:00（9:30～受付開始）

■ **開催場所**
鹿児島市立美術館（鹿児島市城山町4-36）

■ **内 容**
◉ 午前
09:30 受付開始、10:00 開会挨拶・自己紹介、10:20 講義「植物のセラピー効果を地域ケアに活かす」、12:30 昼食
◉ 午後
13:20 園芸療法プログラム1「岩崎先生の解説を聞きながら、美術館前庭や中央公園を散策しよう」、14:05 休憩、14:15 園芸療法プログラム2「岩崎先生の解説を聞きながら、展示室の植物絵画作品を見よう」、15:30 休憩、15:45 園芸療法プログラム3「色々な豆を使った豆チャームづくり」、16:05 休憩、16:15 質疑応答、16:35 ふりかえり、16:50 講評、17:00 終了、解散

■ **受講者数**
10名（鹿児島6名、熊本1名、福岡2名、千葉1名）

■ **事前アンケート**

質問
研修会に期待することは何ですか。

❶ 博物館の活動の中でも、ストレス緩和や落ち込み，不安などの感情を改善できる機会があるのではないかと考えております。本研修会を受けることで、どのような活動がストレス緩和などに繋がるのかを学びたいです。

❷ 本市の博物館は公園内に所在しており、以前博物館に勤務していたときにも、この環境を生かした博物館活動を行えていたとはいえず、新しい可能性について模索できる場になればいいなと考えています。
また、現在の職務上、植物や自然について触れる機会は多い方ではあるのですが、それは公園管理者としての実務的な視点（特に維持管理）のみで、しかもそのほとんどは維持管理等を行う造園業者を通してのものです。加えて、現在の部署も配属されてからまだ半年ということもあり、その効用について特段の知識を持ち合わせておらず、公園利用者の目線からの公園管理という観点も十分持ち得ていませんので、いろいろな新しい発見があると期待しています。

❸ 私が勤務している芦北町立星野富弘美術館は、星野富弘氏が描く草花の詩画作品を展示しています。園芸療法が当館のワークショップに活かせるのではないかと期待しています。

6-4

豆チャームづくり

公園散策

「博物館・美術館deやさしい日本語」⑤

■ **講 師**
村田 陽次
（東京都生活文化スポーツ局都民生活部地域活動推進課）
専門分野：共助・共生社会づくり
髙尾 戸美（合同会社マーブルワークショップ）
専門分野：博物館学

■ **講師から一言**
ミュージアムにとって、やさしい日本語を導入する意味とはどのようなことでしょうか？また館内外において、それらはどう受け止められ、どのように展開すれば良いのでしょうか？多摩六都科学館の事例から皆さんの現場における取り入れ方をイメージし、在住外国人の方向けにやさしいミュージアムの第一歩を歩み出したくなる場にできればと思います。

■ **開催日時**
2023年9月5日（火）10:00～17:00（9:30～受付開始）

■ **開催場所**
恩納村博物館（沖縄県国頭郡恩納村字仲泊1656-8）

■ **内 容**
◉ 午前
09:30 受付開始、09:50 開会挨拶、講師紹介、参加者自己紹介、10:20 講義「多文化共生とやさしい日本語」（村田陽次）、11:20 休憩、11:30 質疑応答❶、12:05 昼食
◉ 午後
13:00 事例紹介「多摩六都科学館の取り組み」（髙尾戸美）、14:00 休憩、14:10 質疑応答、14:50 展示室見学前の説明、15:00 展示室見学、15:10 休憩、15:20 ワークショップ「博物館のワークシートをやさしい日本語で作成してみよう」ファシリテーター：緒方泉（九州産業大学地域共創学部）、15:50 発表・講師による講評、16:35 ふりかえり、17:00 終了、解散

■ **受講者数**
19名（沖縄16名、福岡1名、岡山1名、東京1名）

■ **事後アンケート**

質問1
今回の研修会で、村田先生の講義から学んだことは何ですか？

❶ 在住外国人にとって、一番通じる言葉が日本語ということが調査ではっきりとしているということを知ることができました。また、在住外国人の方々が日本で生活するにあたって、日本語を学習しており、日本語学習の教科書的な文章が伝わりやすいという事例に触れることができました。さらに、案内などの表示では日ごろ、難しくしてしまいがちな文章表現ですが、日本人に対しても簡潔で直接的な表現の方が理解されやすいのではないかと思いました。
在住外国人の多い東京都の事例でしたが、沖縄科学技術大学院大学のある恩納村でも様々なルーツの方が在住するようになっており、取り入れていくべき取り組みだと感じました。

❷ 展示解説で「難しい言葉は補足する」というので、かなり気持ちが楽になりました。私はスペース節約のために、よく熟語を使って文を短縮しています。そのため、やさしい日本語を使うことで、1枚のパネルの文字数が多くなることを懸念していました。別途補足した解説をパネルの横に置けたら、作り手もやりやすいと感じました。その補足説明からクイズにしたり、他の展示品の解説につなげたりするとおもしろいと思いました。

質問2
今回の研修会で、髙尾先生の講義から学んだことは何ですか？

❶ 多摩六都科学館における「やさしい日本語」の導入事例

講義風景（村田先生）

グループワーク

6-5

を、段階ごとに知ることができました。特にスタッフ研修の成果として、来館者に対して、最初にやさしい日本語で話しかけることで、外国語対応が減少したという成果があったことを知ることができました。他の参加者の感想にもありましたが、まず日本語で話しかけてみるという取り組みは在住外国人だけではなく、日本的な対応を望む訪日外国人にも良い印象を与えるツールになるのではないかと感じました。
また、やさしい日本語が万能ではないものの、ウェブページや印刷物の日本語表現を見直したいです。そうすることで、担当者たちも内容の理解が深まる点や分野・テーマに興味のない方の目にとまりやすくなるかもしれないという点に配慮して、今後、工夫してみたいと思いました。

❷ 博物館を地域との交流の場にする、というのに感激しました。私がやってみたい理想の形だったからです。子どもから高齢者まで楽しんでもらえるようなことがしてみたいのですが、限られた予算と人員ではなかなか実施できずにいます。過去、本町資料館のロビーに、世界地図に国旗をマジックテープで貼れるものを作って設置したことがあります。しかし、小学生たちが貼る、はがすを繰り返して一瞬で破壊されました(笑)。「分かる」喜びと聞いて、その出来事を思い出しました。いつも単調に解説していたので、次回からは、「分かる」ことを意識して作ってみます。

質問3
午後のワークショップでは、恩納村博物館の5つの作品解説を「やさしい日本語」で作成しました。
作成してみた感想、班で話し合ったことや講師からのコメントでの気づきをお書きください。

❶ 私たちの班は、古民家の解説が課題でした。現在の解説は伝えたいことが書かれているので、大枠はそれから外れず、やさしい日本語化することに取り組みました。村田先生からの講義で「やさにちチェッカー」などの確認ツールも紹介していただきました。しかし、どのレベルに言い換えれば良いかというのに、班員とともに頭を悩ませました。ワークショップ中に、村田先生からも言い回しのアドバイスをいただき、やさしい日本語化した解説を発表できたと思います。
一方で、サバニ(沖縄などで使われていた漁船)の班のように、既存の解説とは違った視点で、資料紹介をしても面白さが表現できるなと思いました。

❷ 詩や和歌の表現をどうやさしくするのか悩みましたが、私はそのままの表現がしたく、その意見を押し通しました(笑)。日本らしい季語や言葉(今回だと「月にかかる」や「名月」など)は、独自のものですから、海外の方などにもそのままの言い回しで知ってほしいと思いました。言い換えが難しい場合は、図や絵で表現すると良いという話もありました。そこで、絵を描いたりするのが好きな私は真っ先に、「絵を描く」という選択をさせてもらいました。これは今後のキャプション作りの際にも、どんどん挑戦しようと考えています。

質問4
今回の学びを今後の活動に、どのように活かしていきたいですか。

❶ 現在の展示解説は、直接的な表現を避けるために、どうしても文章が長くなるなどしがちだと思います。二重敬語やあいまいな表現に繋がり、分かりにくくなってしまいます。
しかし、やさしい日本語という取り組みを踏まえた表現に立ち返ることで、様々な世代にも伝わりやすいものになると思います。
今後は館内の表示やお知らせ、ウェブページなど更新しやすいところの見直しや新規発信の際のチェックを行いたいと思います。また、企画展などの際には見出しなどに取り入れるなどし、解説への導入にできれば思います。さらに、グループワークで各班が作成したやさしい日本語の解説文は、今後の展示解説に取り入れたいと思います。

❷ 今回は本当にたくさんの学びがありました。いつも分かりやすさを意識していたつもりでしたが、不十分だったと気づきました。3月に海外調査の報告展を予定していますので、そこで「やさにち」と研修を通して思いついたことを実施してみます。

❸ 皆さんの作成した資料を基に、すぐにでも展示に付け加えることができるものを作成し、展示したいと思います。観光客、子どもたちも多く利用がありますので、早急に対応したいと思います。そのためには、館内の理解を得ることが一番だと思いますので、館内で話し合いや共有の場を設けたいと思います。

6-5

「博物館・美術館deやさしい日本語」⑥

■ 講 師
村田 陽次
(東京都生活文化スポーツ局都民生活部地域活動推進課)
専門分野:共助・共生社会づくり
髙尾 戸美(合同会社マーブルワークショップ)
専門分野:博物館学

■ 講師から一言
前掲のとおり

■ 開催日時
2023年10月20日(金)10:00~17:00 (9:30~受付開始)

■ 開催場所
熊本市現代美術館(熊本市中央区上通町2-3)

■ 内 容
◉ 午前
09:30 受付開始、09:50 開会挨拶、講師紹介、参加者自己紹介、10:20 講義「多文化共生とやさしい日本語」(村田陽次)、11:20 休憩、11:30 質疑応答❶、12:05 昼食
◉ 午後
13:00 事例紹介「多摩六都科学館の取り組み」(髙尾 戸美)、14:00 休憩、14:10 質疑応答、14:50 展示室見学前の説明、15:00 展示室見学、15:10 休憩、15:20 ワークショップ「博物館のワークシートをやさしい日本語で作成してみよう」ファシリテーター:緒方泉(九州産業大学地域共創学部)、15:50 発表・講師による講評、16:35 ふりかえり、17:00 終了、解散

■ 受講者数
12名(福岡6名、熊本2名、宮崎1名、山口1名、岡山1名、東京1名)

■ 事後アンケート

質問1
今回の研修会で、村田先生の講義から学んだことは何ですか?

❶ 既存のパネルやパンフレットで見直すポイント(工夫)が大変わかりやすかったです。いかにシンプルな情報にするか、来館者が何を知りたい、学びたいと感じているかを整理することで、本来の展示解説を学び直したようにも感じました。

❷ 在日外国人にとって、一番わかる言葉は日本語!外国の人たちのためだけではない、「やさしい日本語」の意義など、目からうろこのレクチャーでした。やさしい日本語は奥が深い!と実感しました。

❸ 基本的なルール(1文に1メッセージ/熟語・和製英語・オノマトペは極力使わない/敬語やくだけた表現は使わない/わかち書き、総ルビが基本など)を学ぶことができました。
また、実際に、やさしい日本語を使う時は、「やさにちチェッカー」などのツールを使用して、レベルを確認しながら試行錯誤することといった技術的なことだけでなく、「伝えたいことよりも相手が知りたいことを思いやって伝える」ことなどを意識することも大切であることが理解できました。

❹ 課題としていた、歴史文化にかかわる事実と伝わりやすさの両立については、固有名詞や専門用語は無理してやさしくしなくてよく、画像やイラストを使って補えばよいという明快な回答と事例の紹介があり、課題の解決につながりました。また、博物館が調査研究で蓄積した情報のすべてではなく、「やさしい日本語」が簡単な案内や作品への導入部分に向いていることも納得がいき、将来的な展示解説等への導入へつながりやすくなったと思います。また、学芸員個人ではなく、館全体で「やさしい日本語」の導入に取り組むためには、「やさしい日本語」が、在留外国人だけでなく、子どもやお年寄り、障がいのある人にも伝わりやすい言語であり、多文化共生の実現に役立つことを共有することが重要だと感じました。

6-6

講義風景(髙尾先生)

グループワーク

質問2
今回の研修会で、髙尾先生の講義から学んだことは何ですか？

❶髙尾先生の事例紹介で、具体的にやさしい日本語をどのように活用しているかを知ることができました。その館によって、とくに地域にどの国籍の外国人が多くいるのかなど、まずは現状をよく調べて、その館に特に必要なことを取り入れていく、行動しながらどんどん良くしていくというのが大切だということも改めて感じました。

❷髙尾先生はいつもご自分の体験を話してくださるので、現場感覚や肌感覚が伝わってきて面白いです！スタッフの「やさにち」研修から、印刷物、ウェブ、プログラムの実践と、さまざまな実例をお示しいただきました。対象を「やさにち」ユーザーに限定したワークショップもあれば、対象を限定せずに行ったプラネタリウムなど、目的・内容・形式によって色々な組み合わせを図るべきなのだと知りました。プラネタリウムで対象を限定したら、「排除」を感じさせてしまったというエピソードは、やってみないと気づかないだろうなぁと思った次第です。「やさにち」は社会課題の解決にとって、確かに一つのツールだと思います。しかし、情報として知られている地域の社会課題を本当の意味で理解するには、実際に行動してみなくては始まらない、ということを学んだように思います。「やさにち」を導入することによって問題が解消される、解決されるという単純な話ではなく、おそらく次の課題や扉に出会うのだろうと思いました。

❸学芸員が個人として導入するのではなく、組織として館全体で導入するためのポイントを学ぶことができました。例えば、「やさしい日本語」は「多文化共生」社会の実現に役立つから必要であり、「多文化共生」社会の実現は、ICOMによる博物館定義（2022年改訂）や博物館法改定の目的、博物館法施行規則に、博物館のなすべき社会的な役割として定められていることなどは、説得の材料として有効であると感じました。多摩六都科学館が、ミッション（「社会的包摂」）に基づき、地域課題を「多文化共生」と認識し、これを解決するために、文化庁補助事業の採択をうけ、館全体で「やさしい日本語」を導入した事例は、とても参考になりました。

質問3
午後のワークショップでは、熊本市現代美術館の3つの作品解説を「やさしい日本語」で作成しました。作成してみた感想、班で話し合ったことや講師からのコメントでの気づきをお書きください。

❶実際に取り組んでみて、考えること自体がとても楽しかったし、3人でアイデアを出し合いながら進められたことがとてもよかったです。もっと「やさにち」できるんじゃない?と言いながら、さらに考えを深めていくことができ、一緒に達成感を味わえたこともとてもよかったです。

❷展示解説文を作成する際に、解説を読む人の立場に立って、利用者側の「知りたいこと」を想像することがとても重要であることに気が付きました。普段、自分が学芸員としてキャプションやリーフレットを作る際に、いかに自分が「伝えたいこと」を優先してきたのか、身につまされる経験でした。
また、解説文をやさしい日本語に変換していくと、解説文で発信できる情報の量が限られるため、よりその資料や作品の本質的な価値を見つめなおす機会となることも理解できました。

❸館種が異なっても悩むところが同じ、似ていると感じました。反対に館種が異なるからこその着眼点や、言葉の言い換えの工夫にバリエーションが生まれたように感じました。班では、現代美術の良い「あいまいな表現」をいかにあいまいにしない「やさにち」にするかは大変だと意見が合致しました。その分、あいまいにしないという「やさにち」のポイントを何度も振り返ることになり、「やさにち」変換のいい練習になったと思います。

質問4
今回の学びを今後の活動に、どのように活かしていきたいですか。

❶当館は近々大規模リニューアルを実施する予定で、リニューアル後の博物館活動について、館内で議論しています。博物館法の改正や社会の変化に合わせ、リニューアル後に当館がどのように地域社会に貢献していくのかについても検討しているが、なかなか今後の博物館活動のもとになるミッションやリニューアルのコンセプトを設定できずにいます。以上のような課題意識があるなかで、今回の研修に臨んだため、多摩六都科学館における「やさしい日本語」の導入事例は、大変参考になりました。ミッションを定め、それに基づき解決できる課題を共有し、館全体で「やさしい日本語」をつかって社会的に貢献しようという、多摩六都科学館での事業手法は、当館の博物館活動の再構築を図る上で活用していきたいです。

❷既存のパネルで言い換えるには、情報を整理して、何を掲示するかを実践したいと思います。できれば、普段展示に関わらないスタッフとも一緒に考える機会を設け、展示以外の館内案内にも活かしたいと思います。「やさにち」の考え方を少し知っているかどうかで、受付や売店の接客も変わっていくのではと期待しています。

❸来年度、無料の展示室でコレクションを使った小企画を担当する予定なのです。そこで「やさにち」をテーマにやってみたいと思います。あいさつ文や解説だけでなく、対話型鑑賞も「やさにち」でトライしてみたいです。さらに、熊本市内にインターナショナルスクールの小学校が1校開校する予定なので、ぜひ連携できればと思います。

6-6

「資料館 de 音楽療法」 ⑦

■ **講 師**
井上 幸一（福岡女子短期大学音楽科准教授）
専門分野：音楽実践論/音楽療法

■ **講師から一言**
音楽療法は、フレイル予防やストレスケアを含む心身機能の維持・改善を目的として、幅広い対象に実践されています。今回の講座では、展示資料のイメージを基に、身近にあるモノを活用した音探し《サウンドサーチ》を行い、参加者の皆さんが響きを共有する「博物館浴」におけるミュージッキングを体験していただきます。この講座が資料館における新たなアクティビティの発見や、気づきにつながることを願います。

■ **開催日時**
2023年8月9日（水）10:00～13:00（9:30～受付開始）

■ **開催場所**
時津町民俗資料館（長崎県西彼杵郡時津町野田郷62）

■ **内 容**
◉午前・午後
（台風6号接近のため、時間を短縮して実施した）
09:30 受付開始、10:00 開会挨拶、講師紹介、10:05 講義「ミュージッキングの概念と博物館浴」、10:35 展示室を個人で鑑賞、10:55 体験活動1（展示資料から音を探し、身近なモノで音を再現する、楽器を探す、試演する）、11:00 休憩、11:05 ギャラリートーク、11:15 体験活動2（ギャラリートークを聞いて、新たな音を探す、試演する）、11:50 井上先生への質問、12:15 ふりかえり、12:30 終了、解散

■ **受講者数**
4名（長崎1名、福岡3名）
＊台風接近のため、当日、受講予定者から不参加連絡あり

見学風景（2021年10月撮影）

楽器製作の材料

6-7

■ **事後アンケート**

質問1
井上先生の講義で、印象に残っていること、興味深かったことをお書きください。

❶展示資料を視覚だけでなく、「聴覚・触覚」などの別の視点から、思いを巡らしながら見ることで新たな見え方ができるということを学びました。資料を実際に使った時に、どんな音がしただろうかと思い巡らしながら見ることで、その資料の使い方がより活き活きとイメージできるという気づきがあり大変興味深かったです。

質問2
民俗資料を活用した「音探し」の鑑賞、そして探した音から「楽器を作り、演奏する」という体験学習の感想などをお書きください。

❶これまで、資料鑑賞時に音をイメージすることが無かったので、最初はどのようにしたらよいのかと不安もありました。しかし、講義にあったオノマトペを活用することで、かなりイメージしやすくなりました。資料からイメージされる音を出す楽器作りでは、素材の音を聴き比べて、イメージに合う音を拾い集める過程がとても楽しかったです。同じ資料でも、他の人のイメージする音はまた違っていて面白く、数人のイメージを共有することで、その資料について多面的に知ることができるので、深い学びが得られると感じました。

質問3
仲間とともに過ごした時間（音探しや楽器作り、演奏などでのコミュニケーションから生まれた新たな気づきなど）について感想をお書きください。

❶音探しの際に、各資料からイメージする音をグループで共有すると、資料から浮かぶ音、その資料を使っている情景、生活背景などが掘り下げられる体験ができました。一人で考えるより、その資料についての見識を深めることができたと思います。また、演奏では、お互いのイメージを重ねて演奏することができました。台風接近のため、短時間になりましたが、お互いに協力して作品を作り上げた、とても印象深い時間でした。

質問4
今回学んだことを、今後の学芸員活動、民俗資料館の活動でどのように活かしていきたいですか？

❶学校見学等で説明対応をする際、これまでは資料の音をイメージさせるような説明はできていませんでした。今後は、資料から発せられる音をイメージさせるような説明を行うことで、よりその資料を活かすことができると考えるので、今後取り入れていきたいです。また、展示資料の新たな鑑賞・活用方法として、今回学んだ楽器作りのワークショップを親子対象で企画したいと考えています。

「博物館・美術館 de ポスター／チラシデザイン」 ⑧

■ **講 師**
井上 広一（有限会社ORYEL）
専門分野：アートディレクション、グラフィックデザイン

■ **講師から一言**
展覧会の広報物制作などに役立つグラフィックデザインの基礎知識や作成プロセスを、架空の展覧会を想定したポスターの作成事例を交えながら、楽しく学べる講座にしたいと思います。

■ **開催日時**
2023年9月18日（月・祝）10:00～17:00（9:30～受付開始）

■ **開催場所**
佐賀県立博物館・佐賀県立美術館
（佐賀市城内1-15-23）

■ **内 容**
◉午前
09:30 受付開始出席確認、10:00 今日の実習の説明、講師紹介、自己紹介、10:10 講義「デザインの基本」、11:10 演習 ❶「チラシの相互評価」（グループに分かれ、講義をもとに、持参した博物館、美術館のチラシ相互評価する）、11:30 演習 ❷「改善点をもとに、チラシラフ案作成、井上先生の講評」、12:00 昼食
◉午後
13:00 演習 ❸「デザインとコピーを考えてみよう」（架空の展覧会チラシをデザインする。テーマは、「日本中の面白いダルマを集めた展覧会」、パソコン使用）、14:10 ワールドカフェ（各グループの進捗を見学し、新たなアイデアを見つける）、14:40 休憩、演習 ❹「架空の展覧会チラシの制作作業」、15:30 ワールドカフェ（各グループを回る井上先生の講評を聞く）、16:30 ふりかえり、17:00 終了

■ **受講者数**
23名（福岡12名、佐賀1名、熊本2名、長崎3名、鹿児島1名、山口2名、東京2名）

■ **事後アンケート**

質問1
今回の研修会で、井上先生から学んだことは何ですか？

❶「情報を整理すること」です。あれもこれもと情報を詰め込みたくなって、気が付けばごちゃごちゃとしているということがこれまでもよくあったと改めて感じました。チラシのデザインに入る前の事前準備として、伝えるべき情報を整理した上で、取り掛かるべきなのだと、先生から学ばせていただきました。

❷ これまでは凝ったデザインを心掛けて難しく考えていましたが、研修を受けて、標準的な書体でも太さやカーニング等の調整でもかっこよいチラシが出来ることが分かりました。また、書体や配色によって意味があることも知り、デザインの基本を学べて良かったです。

❸ 先生の言葉で一番印象に残っているのが、「デザインはコミュニケーションツールである」ということです。伝える相手を具体的に想定してターゲットを絞るという当たり前のことが、自分がポスターなどを作成しているときは思い浮かんでいませんでした。今後は、伝えたい相手のことをしっかり考えて制作したいと思います。

❹ これまで、私は自分のイメージが先行して、ポスターを作りがちでした。しかし、先生のアドバイスにより、内容と伴っていない事に気づくことができました。今後は内容に関して、適切にお客様にお伝えすることができるチラシ、ポスター制作を行っていこうと思います。

講義風景（井上先生）

チラシ案講評風景

質問2
午後からの「ダルマ展」チラシ制作演習で、日ごろの制作をブラッシュアップする、どんなヒントを得ましたか。井上先生からいただいたアドバイスは、どこが参考になりましたか。

❶ 他の参加者の制作したチラシを見ていて、すっきりとしたデザインのものが多いように感じました。自分は、つい目立たせることに気をとられ、インパクトを意識しすぎてしまうきらいがあると実感しました。テーマやコンセプトによって、その見せ方は使い分けるべきということを、今回の演習を通して学びました。
先生に余白のことで質問をした際、適度な余白を残すことも大事だというアドバイスをいただきました。隙間があると、デザインやテキストを追加したくなる衝動に駆られてしまいますが、あえて抜くことでより効果的にデザインを見（魅）せられるのだと理解しました。

❷「余計なものは入れないこと」を再認識しました。フォントに影を入れたり、文章を長く書きすぎたりすることは、作り手側から見ると満足するものになりますが、見る人がすんなりと受け入れられるような、分かりやすいデザインを心がけようと思いました。

❸ 主要な情報発信のターゲットによって、使用する写真素材やテキスト、キャッチコピーなどを工夫する必要があること、そして、ただ漠然と写真を並べているだけではいけないという、デザインの基本的な点を学びました。さらに、写真の背景をデザインの配色とリンクさせることで、より一体感を表現できるということを学びました。特に、写真を加工ありきで撮影するのではなく、影や配置などを事前に考えるなどの準備が非常に大切だということが作業手順を示しつつ演習できたため、非常に参考になりました。

質問3
今回の学びを今後のポスター、チラシ制作に、どのように活かしていきたいですか。

❶ 今回、特に気づかされたのは、見る人に「伝える」ということでした。どんなに頑張って作っても、どんなに自分が満足する仕上がりになっても、見る人に伝わらなければ意味がないのだと思いました。今後は、自分だったら、どんなポスター・チラシに目が向くか、興味を持つかを意識しつつ、内容の細部にまで「見る人の視点」をもって制作していきたいです。そのためにも、たくさんのポスター・チラシを見て（読んで）、良いところや、もっと良くするには自分ならどうするかなど、実践的な学びを深めていきたいと思います。

❷ まずすべきだと感じたのは、井上先生が講義の中で仰っていた「日々、様々なデザインを見る、調べる」こと、そして「真似でもいいからやってみること」です。この 2つは、今日からでも実践できることであるため、これによってデザインの種類についての知識を多く習得すると同時に、それを実践できる技術につなげていきたいと思います。

❸ 伝えたい相手を具体的にイメージし、一番伝えたいことを明確にする、これだけでデザインの方向性が決まって説得力が生まれることに驚き、今後に活かしたいと思いました。さらに、見ていて心地よいデザイン、フォントや文字の間の調節、色のまとまり感など、見る人が快適に見られるよう気を付けたいなと思います。ユニバーサルデザインのお話をされている参加者もいて、はっとさせられました。今後は、季節ごとの企画展に、少しでも関心を持ってもらえるポスターやチラシが作れたらいいなと思います。

6-8

「ユニバーサル・ミュージアム」⑨

■ 講 師
広瀬 浩二郎（国立民族学博物館教授）
専門分野：日本宗教史・文化人類学

■ 講師から一言
前半は、一昨年9月～11月に開催された国立民族学博物館の特別展「ユニバーサル・ミュージアム：さわる！“触”の大博覧会」の概要を紹介しつつ、「さわる展示」の意義と可能性について考えます。後半は、ワークショップ形式で実際に資料にさわりながら、「ユニバーサル＝普遍的」な博物館のあり方を参加者とともに楽しく議論します。

■ 開催日時
2023年11月13日（月）10:00～17:00（9:30～受付開始）

■ 開催場所
下関市立考古博物館
（山口県下関市大字綾羅木郷字岡454）

■ 内 容
◉午前
09:30 受付開始、10:00 開会挨拶、講師紹介、参加者自己紹介、10:30 講義「世界はさわらないとわからない-「ユニバーサル・ミュージアム」とは何か -」、12:00 昼食
◉午後
12:5 0演習 ❶「無視覚流鑑賞法の体験（1回目）」、13:20 グループワーク ❶「無視覚流鑑賞の記録記入・共有」、13:45 休憩、13:55 演習 ❷「無視覚流鑑賞法の体験（2回目）」、14:25 グループワーク ❷「無視覚流鑑賞の記録記入・共有」、14:50 休憩、15:00 グループワーク ❸「グループで語り合ったことを全体に発表」、15:25 演習 ❸「見ながらさわって、比較を語り合おう」、15:50 休憩、16:00 演習 ❹「広瀬先生に何でも相談してみよう」、16:30 ふりかえり、17:00 終了、解散

■ 受講者数
30名（福岡13名、山口16名、大阪1名）

■ 事後アンケート

質問1
午前・午後の広瀬浩二郎先生の講義・コメントから学んだことは何ですか？また、心に残るキーワードは何ですか？

❶「触察鑑賞」と俳句の「解き放て　手から鱗の　偏見を」が心に残りました。
ただ触れるだけでなく、段階的に触れる事で物に対する理解が深まっていくといった点から、いかに自分が知識でものを見ており、人に魅せる展示とは知識を展示するだけでは十分でないと感じました。

❷ さわることで得られる情報と感情の大切さが、普段意識をしていないところに有って思いを広げることで、より豊かな経験をする事ができると思いました。

❸ 広瀬先生の「健常者とそうじゃない人の違いとは何か」という問いは、すごく考えさせられました。確かに、健常者というのは常に健康と書きます。しかし、その定義は障がいや疾患があるかどうかというだけで、広瀬先生の言うように障がいがなくて、不健康な健常者はたくさんいます。その逆も然りです。「健常者」とは。これは、今一度考え直すべき言葉なのだろうと思います。

❹ 触察鑑賞の3要素“入”、“流”、“求”が気になりました。“流”や“求”は個々人の発達段階や生活体験によって、かなり差があると思います。子どもたちに触察体験をさせる場合は、子どもたちなりの“流”や“求”ができるように工夫できたらと思いました。

講義風景（広瀬先生）

アイマスクを着けて触察体験

❺ 近年、よく聞くようになったインクルーシブには、多数派が少数派を包摂・包含するという発想に陥りかねないあやうさがあるとの指摘は、この言葉に限らず、ふと立ち止まって今一度その言葉のもつ意味と向き合うことの大切さを自覚させられました。

❻ 講義でとくに印象に残ったのは、触って見ることを表すのに「触覚」ではなく「触角」という語を使いたいと言われたこと、また感覚を鋭くして、想像力を働かせることで、物の背後に「人」がいることが見えてくる、と仰っていたことです。

質問2
午後は、初めて「無視覚流鑑賞法」を体験しました。「見ないでさわる」、そして「その体験を書き出し交換する」、さらに「見ながらさわる」「見ながら、さわりながら、解説シートを見る聞く」という流れから学んだことは何ですか？また、仲間たちとの対話から気づいたことをお書きください。

❶ 見えないということは思った以上に大変であり、「右に曲がる」というだけでも具体的にどのくらい曲がるのか、歩きながら曲がるのか、止まって曲がるのか、「目の前に机があり、その上にモノが置いてあります」というのも、目の前とは具体的にどのくらい前なのか、机も高さは自分からすると、どの高さに、机のどこにモノが置いてあるのか、伝える時には具体性が大切ということが分かりました。
また、見ないでさわると、色というのは自分の中にある概念に委ねられ、また、さわるということにおいて、色は関係ないことが分かりました。

❷ 見ないで触ることで、それが何であるのかを探るためモノをじっくり触ることになり、より深い「鑑賞」体験をすることができました。二人で体験することで、一人で触る時より言語化することになり、触覚をよりクリアにすることができました。

❸ 初めての体験で、指先をじっくり動かし、全神経を研ぎ澄ませ対象から伝わる感触を脳と心に届けるかのような時間でした。側で見ている人には、見えない部分が指先で解るという、大きな発見がありました。

❹ 最初、目隠しをした状態でモノに触れた時、何も見えないからこそ普段はしない「匂いを嗅ぐ」「モノを軽くはじく」といったことをしました。見えている状態なら、視覚情報でそれが「何か」分かるからです。
そして、目隠しした状態で触ったときのメモを見た時、自分の話した情報が細かいところまで書かれているのを見てとても驚きました。このメモ一つで実測図をかけるのでは？と考えてしまうぐらい、事細かに書かれたメモだったのです。
この体験では、普段、自分がどれだけ視覚からの情報に頼っているかを実感させられました。また、視覚を遮断して物に触れることで、いつもは気付かない事、気付けない事に気付くこともできるという大変貴重な経験を得ることが出来ました。今回の「物言わぬモノとの対話」を、これからの仕事に役立てていきたいと思います。

質問3
「風景にさわる」体験では、外に出て空気にふれ、その後竪穴式住居や円墳の横穴式石室に入りました。見てさわって、感じて考えたことをフロッタージュで「記録」しました。こうした体験を通じて、気づいたこと、新たなアイデアをお書きください。

❶ 初めて竪穴式住居の中に入りましたが、中に入った時の温度の違いを肌で感じました。目で見る事では感じられない肌で感じる、自分から触りに行く触角とは違う触角を感じました。住居内を触り、フロッタージュすることは触角を視覚に変化できる方法だなと感じました。
具体的なアイデアはありませんが、さまざまな感覚を変化させて、いろいろな方に今までとは違った感覚で展示を楽しんでもらえる方法を模索できればと思いました。

❷ フロッタージュで記録することで体験を持ち帰ることができると思います。鑑賞してもらうだけではなく、観察して、記録し、持ち帰る、という参加者が自ら考え動くことを体験できました。ワークショップに活かしたいです。

❸ フロッタージュする、というお題があったおかげでただ触るのではなく、その風景の特徴を探すことになったので、よりじっくり観察できました。

❹ 美術館、博物館の展示を鑑賞するということでは環境的に室内であることが多く、気温や匂いなどの情報はフラットな状況が多いので、外に出て、竪穴式住居に入る時の湿った空気や、薄暗い感じ、中に入った時の体感温度の変化などを感じるのが面白く感じました。普段意識して使っていない感覚がほぐれてリラックスする感じがしました。

❺「風景にさわる」体験では、感じる内容が各々の生活体験や知識に左右されると思いました。事前にある程度の情報を知ってから体験するほうがよいのか、それとも何も情報を入れないまま体験するほうがよいのか、試行錯誤していくのも

必要ではないかと思いました。

質問4
今回の研修会について、参加して良かったなあ、今後自分の館でこんなことができそうだなあと思う点があればお書きください。

❶ 今回の研修会で、あらためて障がい者への対応について勉強させてもらいました。
水族館での展示は、障がいを持たれている方にとってやさしくない展示なんだと思います。視覚に頼って生活している人には「見て楽しむ・学ぶ」ことができますが、触角に頼っている方には満足できる展示ができていないと思います。車いす使用者、手話で会話をする方は館内で見ることが時々ありますが、視覚障がい者の方を見かけたことは入社してからほとんどありません。これは触角に訴える展示が無いからだと思います。水族館では毎年特別支援学校などを対象に移動水族館教室を実施しているので、支援学校の先生などにも意見をいただきながら、視覚だけの展示にならない工夫が出来ればと思います。

❷ 視覚障がい者の妻と生活しているなかでは、触らせてモノを理解してもらうことは日常ですが、自分が見ないでモノに触れることは、衝撃的でした。植物園では許可を得て花に触らせてもらい、匂いを嗅いで拙い私の説明で花を鑑賞していましたが、考古博物館では小林さんに色々な出土品に触らせてもらい、丁寧な説明をしていただきすばらしい経験をさせて頂きました。健常者は見てほとんどの情報を得ていますが、視覚障がい者の妻には、たくさんのモノに触らせて、いままで以上に丁寧な説明を心がけようと思いました。

❸ 今回は、支援者の方や当事者の方を交えての研修だったため、研修中以外でも色々と情報をいただくことができ、より実感を持って研修の内容を得られた気がします。当事者に助言をいただきながら、プログラムを開発したり、館内を整えたりする重要性を改めて感じました。また、当事者も様々であるため、全体をカバーすることはなかなか難しく、対話しながらできること、できないこと、何を必要とされているかを知っていき、ポイントをおさえることが大切だと感じました。自館でも相談させていただいている方々がいらっしゃるため、より対話を重ねて、反映していけるようにしたいです。

6-9

博物館リンクワーカー人材養成講座

連続講座オンライン語り場「withコロナでも地域住民とつながっていく方法を考える」という名称で開催

【開催趣旨】

カナダの医師会は2018年11月から、患者の健康回復を促進する治療の一環として、美術館への訪問を「処方箋に書く」取り組みを始めています。医師会とモントリオール美術館が連携し、心身にさまざまな健康問題を抱える患者とその家族などが、無料で美術館に入館し、芸術文化の健康効果を享受できるようにしました。

また、英国のロンドン大学の研究グループは、展覧会やコンサートなどの文化芸術を鑑賞する機会が多い人の方が、全くない人に比べ、死亡率が有意に低いと報告（2019年）、さらに、ウェストミンスター大学のAngela Clow（2006年）やワシントン大学のTer-Kazarian（2019年）は、美術作品を昼休みの短時間に見るだけでも、ストレスの軽減になると報告しました。

現在の日本は、団塊世代が75歳以上になる「2025年問題」に続き、高齢者人口がピークを迎える「2042年問題」や約7人に1人の若者がメンタルヘルス不全を抱えるという、大きな健康課題を抱えていると言えます。

地域にある博物館に、できることはないのか?

そこで、本事業では、カナダをはじめ、米国、英国、台湾などの事例調査をもとに、地域住民に向けた「博物館浴*」プログラム開発、そして学校、医療・福祉機関と博物館などをつなぐリンクワーカー人材育成を目指すことで、社会資源の新たな活用方策＝社会的処方の場となる「博物館健康ステーション」運用方策を提案したいと考えます。

今回の連続講座は、「オンライン語り場」と名づけています。

毎週金曜日の午後からの90分。地域の博物館、美術館などを活用しながら、地域住民の健康と学びを支える実践を粘り強く進めている、医療・福祉従事者、学芸員からの話題提供を受け、その後は参加者と一緒に意見交換を行う「語り場」とします。

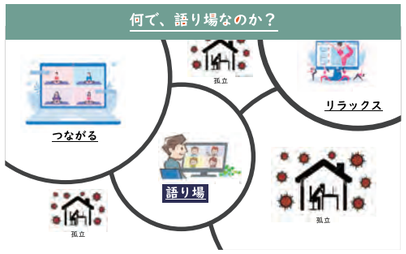
こうした「語り場」を通じて、地域の学校、社会教育施設、医療・福祉機関が協働した「誰もが全国5,700ある博物館のリンクワーカー」という、新たな地域人材育成の方策やプログラム開発を考える機会を共につくりましょう。

もちろん、私たち学芸員の健康なくして、よりよい博物館活動はできません。

金曜日の午後からの90分。大いに語り合いましょう。

＊博物館浴：博物館見学を通して、博物館の持つ癒し効果を人々の健康増進・疾病予防に活用する活動

何で、「連続講座オンライン語り場」なのか？



ほっとする90分を仲間たちと創りたい！

学びたい！、つながりたい！

リラックスしたい！

みんなの健康があって、博物館活動がある

「連続講座オンライン語り場」進行方法

各回の開催時間は13:30～15:00（90分）とし、基本的に最初の30分は講師からの話題提供、その後はブレイクアウトルームで4名程度のグループを作りディスカッション（20分）、各グループからの発表（20分）、最後に参加者のふりかえり、講師からのコメントを受け終了。

開催方法

Zoomウェビナー方式によるリアルタイム講座

7

第1回 博物館と医療・福祉機関の連携の進め方

■ **講 師**
中込 潤（九州産業大学美術館 学芸室長）、
藤 洋介（香椎丘リハビリテーション病院地域連携室 室長、医療ソーシャルワーカー、社会福祉士・精神保健福祉士）

■ **講師から一言**
九州産業大学美術館と、香椎丘リハビリテーション病院は昨年から連携事業を行っています。その進め方や、連携のメリット、課題など、具体的な事例を交えながら、双方の視点でお話します。

■ **開催日時**
2023年11月10日（金）13：30～15：00
（13：15～受付開始）

■ **受講者数**
31名

■ **事後アンケート**
本日の感想をお書きください。

＊博物館関係者が福祉・医療関係者とつながっていくのは重要な反面、うまく機会を掴んでいかないと、やはりなかなか難しいと感じています。そうした中、香椎丘リハビリテーション病院・藤さんの「地域のさまざまな社会資源とつながっていくのは、病院にとって重要で当たり前」という言葉は、病院側にもそうしたニーズがあるのだという気づきになりました。連携の際には、お互いのニーズをうまく擦り合わせていくことが大切だと感じました。

また、そうした取り組みの窓口として、ソーシャルワーカーさんに頼るという具体的な方法も知ることができて、大きなヒントになったと思います。

＊本日も実りある時間をありがとうございました。1年ぶりにお目にかかる方々もいて嬉しく思いました。参加者それぞれの方が感じる「繋がり」があり、プログラムを提供される側だけでなく提供する方も楽しめる、相互に楽しめることこそがエンゲージメントであるということもとても興味深かったです。

＊第1回目は無事に終わり、ありがとうございます。久しぶりの語り場で、楽しかったです。
今年のテーマはつながりとは･･･。
職場が地域共生社会推進課と、ど真ん中のところですから、職域を越えた方々との「つながりの語らい」は楽しかったです。いろいろな分野での越境、クロス人材、リンクワーカーなどの育ちが楽しいです。
来年度予算の時期です。またもや楽しいことしようかなと企みが湧いて来ました。

第2回 「歴史文化財課 佐野さんの民具図鑑」の作り方

■ **講 師**
佐野 正晴（甲賀市教育委員会事務局歴史文化財課 主査）

■ **講師から一言**
ケーブルテレビで放送中の「歴史文化財課 佐野さんの民具図鑑」。市所蔵の民具（人々が生活や仕事のなかで使ってきた道具・用具）を紹介する番組です。制作の契機や裏側を、その後の展開や反響も交えてお話しします。

■ **開催日時**
2023年11月24日（金）13：30～15：00（13：15～受付開始）

■ **受講者数**
24名

■ **事後アンケート**
本日の感想をお書きください。

＊講義前に、佐野さんの動画を拝見しておりましたが、直接お話を伺うことができ、その熱量を感じました。交流の場でも話題となった民具の収蔵問題については、なかなか解決が難しい状況ですが、それを積極的に活用されていることに感銘を受けました。現在、民具の展示スペースが減少しており、なかなか紹介することができていない状況で、今回の場は、改めて民具の可能性を感じましたし、活用しなければという気持ちになりました。

＊佐野さんの民具図鑑との関わりのお話、とても興味深くお聞きしました。
民俗資料は保存していかなければいけない重要性とその使い方が失われつつある現実の解決法として、高齢者と回想法で会話して、デジタル映像で記録を残す方法はとても素晴らしいと思います。また、民具図鑑の情報をケーブルテレビで常時見られるというのは、高齢者にとって楽しみになると思いました。

＊「佐野さんの民具図鑑」は5分以内にまとめられていて、言葉もゆっくり、耳の聞こえが良くない高齢者にもまた、小学生にも楽しめる楽しい図鑑だと思いました。特別支援学校や、不登校の子どもなど、図鑑を見た後、実際に触ってみることなどできるよう、計画すると会話が広がるのではないかと思いました。

第3回 社会課題と向き合う美術館活動

■ **講 師**
田中 今子（中村キース・ヘリング美術館 学芸員）

■ **講師から一言**
キース・ヘリング（1958-1990）が80年代に行ったHIV・エイズや反戦反核、人種差別に対する活動と、そこから地続きの現代における社会課題に向き合う当館の活動についてお話しします。

■ **開催日時**
2023年12月1日（金）13：30～15：00（13：15～受付開始）

■ **受講者数**
25名

■ **事後アンケート**
本日の感想をお書きください。

＊ICOM（国際博物館会議）の博物館の新定義のなかで、社会課題への積極的な関与が謳われており、今回の田中さんの発表は、大変先進的なものに感じられました。
キース・ヘリングという1人の作家を軸に、さまざまな社会課題に関与していく姿勢は素晴らしいと思います。また、館で働く人びとの多様性、そしてお互いへのリスペクトという点は、本当に見習うべき部分だと感じます。

＊今回はじめて、中村キース・ヘリング美術館の活動について知ることができました。
キース・ヘリングの存在があるとはいえ、積極的に社会問題にアプローチされていることに驚きましたし、博物館は受け身姿勢なことが多いな、と考えさせられました。
後半のディスカッションでは、自然史を担当されている学芸員や地域の活動に取りくまれている方のお話も聞きながら、社会問題にどうアプローチしていくべきかを考える時間にできたと思います。
ミュージアムの専門や特徴に加えて、関わっている地域の状況によっても、抱えている地域課題は異なることを改めて意識することができました。

＊第3回の講座を通して、中村キース・ヘリング美術館の社会課題（HIVやLGBTQ、平和など）に対してのアプローチ等について、とても勉強になりました。また“Art is for Everybody（アートはすべての人のために）”という言葉もとても印象に残りました。

第4回 地域で認知症高齢者を支える ～基本知識と対応法～

■ **講 師**
有馬 泰治（千鳥橋病院総合内科 医師）

■ **講師から一言**
高齢者の入院治療や慢性疾患の外来管理を行っています。医療・介護チームで身体機能や認知機能が徐々に低下していく高齢者のサポートを行っています。今回は、認知症の基本的な知識と対応方法についてお話しします。

■ **開催日時**
2023年12月8日（金）13：30～15：00（13：15～受付開始）

■ **受講者数**
16名

■ **事後アンケート**
本日の感想をお書きください。

＊私どもの館では、認知症の方々を意識した活動というのは皆無でした。
この講座を通して、まずもって「気付き」を得られたことは、間違いなく今後の活動意識の向上へと向けることにつながりました。

＊認知症の症状や認知症の方へのアプローチ方法、千鳥橋病院の取り組み（とりあえず行きます隊など）について学び、知ることができました。

＊人間は、誰でもいずれ高齢になって死に向かっていくと言うことをつくづく考えさせられました。
私は33歳の時に脳静脈の血栓から脳出血になり、病院のICUに2ヶ月間入っていて、症状が進むにつれ記憶がおかしくなり、数の概念がなくなり、排泄もわからなくなって、家族には余命通知もあったらしいです。
その時、毎日家族が年齢・誕生日・住所などから数の概念を教えてくれて、数を理解していった事が思い出されました。今思うと、あれは認知症みたいだったと思います。余命通知されても諦めずに教え続けてくれた事に今更感謝します。高齢者になって、いろいろ勘違いや間違いがあっても個人を尊重し、やさしく教え続けることは重要だと今だから経験から言えます。
有馬さんの高齢者は、「今を生きている」「心は生きている」という言葉を、重く受け止め接していきたいと思いました。

第5回 院内学級※に対するオンラインプログラムの開発 ～これまでとこれから～

■ **講 師**
三角 徳子（福岡市博物館 集客･広報普及専門員（教育普及担当））

■ **講師から一言**
院内学級などの事情により、対面での出前学習が困難な特別支援学校児童を対象に、令和2年度から始めたオンラインプログラムの成果と課題を報告するとともに、今後期待されるオンラインと対面を併存したハイブリットプログラムを展望します。
※ 院内学級：長期の入院治療が必要な児童・生徒のために病院内に設置された学級。

■ **開催日時**
2023年12月15日（金）13：30～15：00（13：15～受付開始）

■ **受講者数**
21名

■ **事後アンケート**
本日の感想をお書きください。

＊オンラインという手法がコロナ禍中に一般化したことで、博物館でも活動の幅が広がったことを感じます。今回取り上げられたような院内学級の場合、博物館に来てもらうことも、こちらから実物資料を持って行くこともできない子どもたちにとっては、福岡市博物館の取り組みは、地域の歴史やモノから分かる歴史など、教科書では習わない観点から学べることに意義があると感じました。しかし、安易にオンラインという便利な手法に頼ることは、モノを活動の中心とする博物館としては難しい面もあると考えます。

＊恥ずかしながら、あまりよく知らなかった院内学級について、初歩的な部分も含めて学ぶ機会となり、とても良かったです。博物館活動を届けるべき、届けたいところはまだまだあるなと思いました。
その上で、何らかのカテゴリーだけでなく、1人1人に人として向き合うことの大切さを改めて感じた回となりました。

＊当館では、コロナ禍にオンラインでのワークショップを実施したことはありましたが、手探りだったため、他館でのオンライン活用の仕方が大変勉強になりました。
オンラインの場合、画面の向こう側の方がどのようなものに興味を持たれるのか、また、飽きさせない工夫は何か、など対面とは異なるポイントを作る必要があると実感しており、福岡市博物館でのコンテンツの作り方、配信する映像など、大変参考になりました。また、院内学級と博物館を繋ぐ、ということで、誰もが学べる、博物館・美術館を活用できるようにする、という基本的姿勢を改めて考えさせられました。博物館・美術館などに来館されたお客様が見やすいように、過ごしやすいように、という視点は現在ではどこの施設もあるかと思いますが、来館されない、できない方にも博物館などを活用してもらうという視点も非常に大切だと感じました。
今後は、来館者だけではなく、幅広い方たちを視野に入れ、さまざまな人に優しい博物館作りを心掛けたいと改めて思いました。

＊病院内の小児科の院内学級でのオンラインプログラムの話はとても興味深いものでした。入院治療中の子どもたちにとって外からの刺激はとても楽しかったと思います。金印で封泥したり、楽器を作ったり、子どもたちの笑顔が思い浮かばれます。オンライン講座が子どもたちに行き渡った事はコロナ禍の数少ないメリットかもしれません。

第6回 考古資料を活かした触覚活用術の実践とその可能性

■ **講 師**
小林 善也（下関市立考古博物館 主任 学芸員）

■ **講師から一言**
下関市立考古博物館が令和３年度から取り組みを始めた､｢触察｣をテーマとした学習プログラムづくり。その顛末と可能性について、博学連携の実践例を中心に、健康への視点も意識しながらお話しします。

■ **開催日時**
2023年12月22日（金）13：30～15：00（13：15～受付開始）

■ **受講者数**
26名

■ **事後アンケート**
本日の感想をお書きください。

＊小林さんのお話は、まさに私が今気になっていたこと（どのように､学校さんに授業の一コマをいただけるようになるのか）、ということにも触れられていたので、大変参考になりました。
先生とのつながりを強化しながら、一緒に生徒の学習や生活のサポートをしていけるよう、私も頑張りたいと思います。
＊触覚を活用した体験プログラムについて、内容だけでなく、実施に至るまでの現状や課題意識等の話もあり、たいへん勉強になった30分でした。
当館でも体験活動を行っていますが､｢ものづくり一辺倒になってしまいがち｣という課題は、私自身も常にひっかかっていた意識でした。実際、ものづくりだけでも参加者は喜んでくれるものですが、小林さんは妥協せずに｢学び｣の要素を追求され、様々な取り組みに挑戦されており、私も見習わなければと、良い刺激を受けることができました。

＊今回もとても興味深い内容でした。コロナ禍の中、ハンズオンが全否定され、ふれあうことに過剰に過敏になっている中、視覚障がい者への触覚活用術はとても大変だったと思います。その中で、この事業を立ち上げた小林さんは並々ならぬご苦労があったことと思います。
あの時期、安全だと思っていても行動できなかった事を反省するとともに、安全性を理解してくださった学校側の方々と小林さんの熱意に感動します。
グループ活動でも毎回異なる分野の方と語る事ができ、話しても話しても、話題はつきませんでした。多分、日常では出会えなかった方々と出会い、語り合い、専門分野が異なると、視点が異なる事を身をもって感じました。
とてもいい機会だったと思います。ありがとうございました。

オンライン講座チラシの表と裏

表 面

裏 面

討論風景

討論風景

博物館のリラックス効果に関する実態調査

リンクワーカーがつないだプログラム参加者への生理測定、心理測定による効果評価の調査

【目 的】

九州・沖縄各県で実施する「健康寿命」増進プログラム開発講座参加者を対象、心理測定（POMS）、生理測定（血圧、脈拍）を行い、プログラムのリラックス効果評価を分析判定する。こうしたエビデンスの蓄積をもとに、地域の博物館と医療・福祉機関をつなぐリンクワーカーに情報提供できる、高齢者のフレイル予防、健康寿命を伸ばすためのプログラム研究開発に結びつけたい。今回は、以下の3会場で実施した。実施に当たり、対象者の承諾を得た。

1 「博物館de回想法」

- **講　　師**　市橋 芳則（北名古屋市歴史民俗資料館専門幹）
  専門分野：博物館学
- **開催日時**　2023年7月28日（金）10:00～17:00（9:30～受付開始）
- **開催場所**　九州国立博物館（福岡県太宰府市石坂4-7-2）
- **実施方法**　心理測定（POMS）、生理測定（血圧、脈拍）
- **参 加 者**　21名

2 「博物館de回想法」

- **講　　師**　市橋 芳則（北名古屋市歴史民俗資料館専門幹）
  専門分野：博物館学
- **開催日時**　2023年9月8日（月）10:00～17:00（9:30～受付開始）
- **開催場所**　宮崎県総合博物館（宮崎県宮崎市神宮2-4-4）
- **実施方法**　心理測定（POMS）、生理測定（血圧、脈拍）
- **参 加 者**　13名

3 「博物館・美術館de園芸療法」

- **講　　師**　岩崎 寛（千葉大学大学院園芸学研究院教授）
  専門分野：環境健康学
- **開催日時**　2023年9月25日（月）10:00～17:00（9:30～受付開始）
- **開催場所**　大分香りの博物館（大分県別府市北石垣48-1）
- **実施方法**　心理測定（POMS）、生理測定（血圧、脈拍）
- **参 加 者**　10名

博物館健康ステーション／ミュージアム・カフェ事業

【目 的】

九州産業大学教員と博物館リンクワーカー人材養成講座を受講した博物館関係者等が地域住民を対象とした「博物館健康ステーション/ミュージアムカフェ事業」を企画立案・実施運営し、博物館資料を活用した新たな「博物館浴プログラム」を開発すると共に、ミュージアムカフェを開催し、地域博物館における居場所づくりを進める。

なお、「博物館浴プログラム開発」に当たっては、鑑賞前後の生理測定・心理測定を実施し、その効果を科学的に評価する。

1

- **開催場所**
  名古屋大学博物館
- **参 加 者**
  8名
- **開催日時**
  2023年5月6日（土）

2

- **開催場所**
  北海道立釧路芸術館
- **参 加 者**
  15名
- **開催日時**
  2023年7月16日(日)

3

- **開催場所**
  釧路市立美術館
- **参 加 者**
  15名
- **開催日時**
  2023年7月17日（月・祝）

4

- **開催場所**
  九州国立博物館
- **参 加 者**
  14名
- **開催日時**
  2024年1月5日（金）

5

- **開催場所**
  南山大学人類学博物館
- **参 加 者**
  19名
- **開催日時**
  2023年1月11日（木）

6

- **開催場所**
  沖縄市立郷土博物館
- **参 加 者**
  17名（午前：高齢者7名、午後：中高生10名）
- **開催日時**
  2024年1月14日（日）

7

- **開催場所**
  下関市立考古博物館
- **参 加 者**
  15名
- **開催日時**
  2024年1月21日（日）

多言語学習教材開発事業

博物館が有する「守る技術（保存・修復）」「調べる技術（調査研究）」「見せる技術（展示）」「伝える技術（教育普及）」（以下、4つの技術）を学ぶために、これまで「仏像」「茶器」「掛軸」「着物」「刀剣」「甲冑」などの取り扱いを紹介する博物館学習映像教材「学芸道」を制作し、シリーズ化してきた（26項目）。これらは、現職学芸員、学芸員を目指す学生、そして「博物館が大好きな」高齢者の学習教材となっている。今回、これらのうちから、「屏風の取り扱い方」日本語版、英語版の計2本として多言語化することで、「いつでも、どこでも」受講可能なオンライン学習映像教材が、海外博物館、美術館などへ広く紹介できるようにした（今回の作成で、27項目38本となった）。また、外国人住民、訪日外国人にとっても、博物館の4つの技術を知る、日本文化を知る、そして博物館のバックヤードを知る教材となることが期待できる。

視聴はこちら！

海外博物館、美術館などにおける「健康寿命」増進プログラム及びリンクワーカーの実態調査

米国調査報告（米国、ニューヨーク）

調査日程　**調査メンバー**　中込　潤（九州産業大学美術館）

- 2023年9月29日（金）**イントレピッド海上航空宇宙博物館**
- 2023年9月30日（土）**ブルックリン美術館**
- 2023年10月1日（日）**ノーウォーク・マリタイム水族館**
- 2023年10月2日（月）**テネメントミュージアム**
- 2023年10月3日（火）**ケアリングカインド／モーニングサイド　リタイアメント＆ヘルスサービス**

【イントレピッド海上航空宇宙博物館】

（インタビュー /リンダ・ケネディ氏、シャーロット・マーティン氏）

イントレピッド海上航空宇宙博物館のシャーロット・マーティン氏に、2021年度の九州産業大学国際シンポジウムでお話しいただいたように、新型コロナは高齢者、とりわけ認知症を患った高齢者に大きな影響を与えた。イントレピッドでも一部オンラインにするなど、コロナ禍においてもサービスを提供してきたが、認知症の高齢者の参加には困難が生じた。認知症の高齢者とその介護者を対象とした「ティーダンス」プログラムは、2022年の春から本格的に対面で行えるようになったが、これらのプログラムではウーバーを使った無料送迎を行うことで移動の障壁を取り除いたり、博物館だけでなく市内の様々な場所で開催したりするなどして、参加しやすい環境をつくる努力を続けている。現在では毎回満席になっているという。これらにかかる費用は、メロン財団の助成金を活用している。

アメリカでは社会の分断がますます進み、多くの博物館が、社会課題に取り組むうえでも、中立の立場ではいられない状況にあるという。今はIED（Diversity, Equity & Inclusion）多様性、公平性、包括性をキーワードとした動きが活発で、館の運営に対して、利用者に対して、展示に対して、全てにおいてこれらキーワードが単なる美辞麗句のスローガンではな

【ノーウォーク・マリタイム水族館】

（インタビュー /本田公男氏）

ノーウォーク・マリタイム水族館はコネチカット州、ノーウォーク川河口付近にある水族館。ロングアイランド湾とその周辺の環境の調査や保護活動に力を入れており、それにまつわるプロジェクトを数多く有している。

同水族館は2023年、「マリタイムサマースクール」の取り組みで、AZA（アメリカ動物園水族館協会）の教育部門の最優秀賞を受賞した。「マリタイムサマースクール」は、2021年に試験的に実施され、幼稚園から 3 年生までの771名の生徒が参加。2022年には幼稚園から8年生までの1,343人の生徒、2023年には幼稚園から8年生までの794人の生徒にサービスを提供した。このプログラムに参加しているのは、学業面でも経済面でも最も困窮している生徒たちである。

水族館の教育部門とノーウォーク公立学校のカリキュラム制作スタッフが協力して、5週間のプログラム「マリタイムサマースクール」を作成。このプログラムは、学校の先生が指導する読み書きと算数の授業と、水族館の教育スタッフが指導する実践的な体験が合わさったものである。生きた動物をはじめとした水族館の資源を生かした学習機会を提供し、子どもたちのやる気を引き出すことに成果をあげている。また、子どもたちだけでなく、その家族も巻き込むことで、より広いコミュニティに影響を与えている。ノーウォーク・マリタイム水族館は2021年にも最優秀賞、2020年、2016年には優秀賞を受賞している。

【ケアリングカインド】

（インタビュー /メレディス・ウォン氏）

ケアリングカインドは、ニューヨーク市にあるアルツハイマー病および認知症の患者とその介護にあたっている人たちをサポートしている専門知識を有した団体。ニューヨーク市内で認知症とその介護者を対象としたプログラムを実施している多くの博物館が、ケアリングカインドのサポートを受けている。ケアリングカインドでは、大きく２つのトレーニングを提供しており、ひとつは、職員、ボランティアを含む組織全体に関わる人（受付、警備員、教育プログラムに関わる人等）を対象とし、認知症の理解を深めるトレーニング。もうひとつが、ファシリテーターとなるスタッフ、ボランティアを対象としたもので、意思疎通の戦略に対するトレーニングとなっている。ときには博物館の求めに応じて、プログラムにオブザーバーとして参加し評価することもある。

【モーニングサイド　リタイアメント＆ヘルスサービス】

（Arts&Mindsのアートプログラムに参加、インタビュー /ロン・ブルーノ氏、トニー・ゴンザレス氏、キャロリン・ハルピン＝ヒーリー氏、プログラムに参加した高齢者）

ニューヨーク市アッパーマンハッタンの西側に、1950年代半ばに中所得世帯向けに建設されたアパート群モーニングサイドガーデンズがある。21階建てで6棟、980戸のアパートからなる集合住宅である。現在住んでいるのは1600人で、その内60歳以上の方は650人と高齢化が進んでいる。

訪問したモーニングサイドリタイアメント＆ヘルスサービス（MRHS）はそのアパート群の一角にある。MRHSは高齢になっても健康で快適に住み続けられるように、家主らによって1966年に設立されたコミュニティで、高齢者とその家族のための質の高い臨床医療サービスを提供している。またすべての居住者はMRHSで定期的に行われる様々なプログラムを利用できる。

今回はArts&Mindsが行うアートプログラムに参加した。参加者は飲み物や軽食を持ちこんで、リラックスした雰囲気の中スタートした。自己紹介のあと、深呼吸をして、会話をしながら、モニターに映した作品数点を鑑賞した。その後、作品に因んだ「魔法」というテーマで絵具とクレヨン、雑誌やいろいろな色や柄の紙を使った作品作りを行った。制作時間には陽気な音楽を流して制作を楽しんだ。完成した作品は壁に貼り出し、各々自分の作品について語り合った。

参加者の多くはこのプログラムに継続的に参加している。終了後の参加者へのインタビューで、なぜ参加するのか尋ねたところ、「人生を見返すため」「成長するため」「つながりを求めて」「自己を表現できる」「怒りや悲しみが参加することで忘れられる」といった答えが返ってきた。さらに、このプログラムに参加することで、変わったことがあるかという質問に対しては、「自分でつくることで成長を感じることができる。自尊心が高まる」「年寄りは尊敬されないが、ここでは尊厳を取り戻すことができる」「夫はかつて牧師で、今はアルツハイマー病を患っている。絵を描くことなどなかったが、今はアートを楽しんでいる。心の中にまだ残っているものを表現している」「ここに来てコラージュを始めて、それ以来家でも雑誌など見て、材料になりそうなものを集めている」などの答えがあった。

MRHSのプログラムはアート以外にも、運動、健康関連の話、執筆活動、ダンス、合唱、映画など多種多様なものがあるが、共通して大切にしているのは、①みんなが参加できる社交の場となること。②精神的に刺激があること。③楽しいこと。の3つであるという。MRHSはこうした活動を50年に渡り継続しており、地域でもよく知られ信頼を得ている。アパートには一人暮らしの高齢者もいるが、しばらく見かけないと、MRHSの職員に報告があったりするなど、コミュニティーがアパートの住人を皆取り込んでいるような状態にあるという。

英国調査報告（英国、リバプール、マンチェスター、ロンドン）

調査日程　**調査メンバー**　松村 利規（福岡市博物館）、 緒方 泉（九州産業大学地域共創学部）

2023年10月31日（火）リバプール
リバプール博物館、ワールドミュージアム

→ 2023年11月1日（水）マンチェスター
帝国戦争記念博物館、国民の歴史博物館

→ 2023年11月2日（木）マンチェスター
マンチェスター美術館、マンチェスター博物館

→ 2023年11月3日（金）ロンドン
ギルドホール・ギャラリー、ナショナル・ポートレート・ギャラリー

→ 2023年11月4日（土）ロンドン
ダリッチ・ピクチャー・ギャラリー

【リバプール博物館】

リバプール博物館（Museum of Liverpool）は、リバプール国立博物館（National Museums Liverpool）の中核館として2011年に開館したリバプール地域の社会・文化の歴史を展示している。1階に「大いなる港」（The Great Port）、2階に「リバプール高架鉄道」（Liverpool Overhead Train）、「都市の連隊」（City Soldiers）、「歴史探偵」（History Detectives）、3階に「民衆の共和国」（The People's Republic）、「素晴らしき場所」（Wondrous Place）というギャラリーが配され、それぞれにリバプールのアイデンティティが示される。

前回訪問時（2015年）に「グローバル都市」（Global City）というギャラリーが配置されていた場所は、特別展示エリア（Temporary exhibition area）として特別展「ハピネス！」（happiness!）が開催されていた。これはリバプールが生んだコメディアンであるサー・ケン・ドットを取り上げたもので、地域の文化的特色に焦点をあて、上階の「素晴らしき場所」（Wondrous Place）とも連動するような有機的展開を見せたものといえよう。

また3階の「民衆の共和国」（The People's Republic）ギャラリーには、新たに「ガルコフとペンブローク・プレイスの秘密の生活」（Galkoff's and the secret life of Pembroke Place）という新展示が配置されていた。リバプールの街の一角にあるペンブロークという場所の歴史を多角的にたどるこの展示は、ガルコフ家というユダヤ人移民と、彼らが営んだ肉屋のたたずまいを象徴的に用いながら、小さな町の歴史を深く掘り下げる意欲的なもので、多くのボランティアとともに文献調査、考古学的発掘調査、住民へのインタビュー調査等を通じて、日頃の調査研究活動がひとつの展示へと結実する様子を垣間見せてくれるものになっている。

ギャラリー “The People's Republic” より
“Galkoff's and the secret life of Pembroke Place”

【マンチェスター博物館】

マンチェスター博物館（Manchester Museum）は、マンチェスター大学（University of Manchester）が運営する博物館で、1867年設立の英国最大の大学博物館である。

同館は前回訪問時（2015年）の後、大規模改修を行い2023年2月に再オープンを果たしたばかりである。改修前後で大きく異なる点としてはまず、エントランスの変更が挙げられる。以前は館が面するオックスフォード・ロード（Oxford Rd）からいったん中庭側に入り込む経路をとっていたものが、道路から直接エントランスへと入ることができるようになった。エントランスの先にミュージアムショップ、さらにその先にメインホールが配置され、そこから特別展示室と、従来の常設展示スペースに分岐する構造になっている。これにより博物館への誘導に大きな向上がみられ、また隣に（上記カフェスペースとは別の）ミュージアムカフェを新たに設置したことで、館内での過ごし方に関する満足度が上がったように感じられる。

常設展示はカフェスペースから階段を上った2階と3階、渡り廊下でつながる別棟の1階から3階にある点は以前と変わらないが、新たに中国文化ギャラリー（Chinese Culture Gallery）および南アジア・ギャラリー（South Asia Gallery）が増設された。とくに南アジア・ギャラリーは新たな試みとして大英博物館と提携し展示を構成している点が注目される。

常設展示冒頭のエリアは、以前から極めて実験的かつ挑戦的な展示が行われていた場所であるが、今回の改修に伴い「絆のギャラリー」（Belonging Gallery）と名付けられた。そこでは“Belonging”という言葉を媒介として、“Relationships”、“Places”、“Movement”、“Actions”、“Everyday Objects” といった諸コンセプトを、収蔵資料だけでなく20 人の地元、国内外のアーティストや作家による漫画が物語るという構成になっており、観覧者の共感（empathy）を呼びおこす仕掛けが施されている。

エントランスからショップを望む。奥にメインホールへの入口。

ギャラリー “ South Asia Gallery” 入口

ギャラリー “ Belonging Gallery” より
“ Everyday Objects”

英国・米国博物館関係者を招聘した国際シンポジウム事業

シンポジウムチラシの表と裏

表 面

裏 面

2024九州産業大学国際シンポジウム「社会課題と向き合う博物館」

【開催趣旨】

博物館は、地域社会でどのような役割を果たすことができるのだろうか？

私たちは、そんな疑問を持つ中、「博物館と健康・ウェルビーイング」に注目してきました。

そして、文化庁からの支援を受け、英国や米国の先進事例調査を進め、両国の博物館関係者と、コロナ禍にあっても途切れることなく交流を継続してきました。

近年は、その成果を広く日本の博物館関係者と共有するため、2019年は「地域社会での博物館の役割」、2020年は「博物館と医療・福祉とのよりよい関係」、2021年は「コロナ禍での博物館活動」「博物館と高齢者の健康、幸福感」、2022年は「博物館浴*と高齢者の健康、幸福感」、そして2023年は「芸術文化・博物館浴による、子ども・若者のメンタルヘルス支援を考える」をテーマに、米国、英国をつないだ国際シンポジウムを対面やオンラインで開催しました。

2024年は、「社会課題と向き合う博物館」をテーマとします。

我が国では、小・中学生の不登校が24万9千人（2022年度調査、文部科学省）を越え、15歳から39歳までの若者の引きこもりは65万3千人（2023年3月発表、内閣府）、そして2025年には認知症高齢者が5人に一人（2022年度高齢社会白書）という深刻な状況にあることから、子どもから高齢者までの健康・ウェルビーイング対策は喫緊の課題である。

こうした深刻な事態の改善に向け、地域の社会資源の一つである博物館は、コレクションを活用して、どのように深刻な社会課題に向き合うことができるのでしょうか？

そこで今回は、英国のダリッチ・ピクチャーギャラリーから「コレクションを活用した、中１ギャップ支援プログラム＝‘Mark Makers’」の事例報告、そして米国から「認知症と共に生きる人々とその関係者への支援活動」の事例報告を受け、社会課題と向き合う博物館の姿、そして今後の展望について、日本の参加者と一緒に考えていきたいです。

＊博物館浴：博物館見学を通して、博物館の持つ癒し効果を人々の健康増進・疾病予防に活用する活動

■開催日時

2024年1月27日(土) 20:00～22:30（オンライン開催）
＊英国現地時間/11:00～13:30
＊米国現地時間/06:00～08:30

■オンライン調整会場

九州産業大学総合情報基盤センター
（福岡市東区松香台2-3-1 中央会館3階）

■開催方法

❶ZOOMによるオンラインにて、日本、英国を同時中継して行う。❷（株）サイマル・インターナショナルによる同時通訳で行う。同時通訳アプリ「interprefy」の使用。

■参加者数

119名

【開催内容・スケジュール】

社会課題と向き合う博物館を考える

■登壇者

◉ジェーン・フィンドレー（Jane Findley）
英国：ダリッチ・ピクチャー・ギャラリー / Head of Programme & Engagement

◉アレックス・ボウイ（Alex Bowie）
英国：ダリッチ・ピクチャー・ギャラリー / Schools Programme Manager

◉メレディス・ウォン（Meredith Wong）
米国：ケアリングカインド/ Director of coonect2culture®

■司会進行

緒方 泉（Izumi Ogata）/九州産業大学地域共創学部教授

■開催の挨拶 日本時間 20:00
緒方 泉（Izumi Ogata）/九州産業大学地域共創学部教授

ジェーン・フィンドレー 20:05~20:25
ダリッチ・ピクチャー・ギャラリーのコレクションを活用した、中1ギャップ支援プログラム＝'Mark Makers'とは？

アレックス・ボウイ 20:25~20:45
Mark Makers'は、どのように学校と関わり、そして教員・子どもたちはどのように変容したのか？

メレディス・ウォン 20:45~21:05
文化芸術で認知症高齢者・家族をいかに支えるのか？

■休 憩 21:05~21:20

■質問を基にしたディスカッション 21:20~22:15

■英国・米国3名から、まとめのメッセージ 22:15~22:25

■閉会の挨拶 22:25~22:30
緒方 泉（Izumi Ogata）/九州産業大学地域共創学部教授

ジェーン氏発表

アレックス氏発表

メルディス氏発表

討論風景

オンライン調整会場全景

【発表趣旨】

ダリッチ・ピクチャー・ギャラリー・コレクションを活用した中1ギャップ支援プログラム＝'Mark Makers'とは？

ジェーン・フィンドレー（英国）

私たちは、現在、そして将来の世代にわたる複雑な社会課題に直面しており、芸術はそれに対して非常に重要な役割を果たします。博物館と美術館は、古くから社会を変えてきた場所です。「Museums Change Lives」はここ10年程キャンペーンで用いられているフレーズで、そのおかげでこのセクターでは社会的な影響力が大きくなっているのが分かります。社会的な影響力の意味について、カリフォルニア・オークランド博物館副館長のケリー・マッキンリー氏は次のように述べています。「大切なのは、私たちの行為の内容や意図ではなく、その効果です。私たちはそれぞれが特定の地域社会に根ざしています。ですから、社会的な影響力とは、私たちを取り巻く地域社会の人々にもたらされる地域の変化のことです。」つまり、私たちが仕事をしている状況はみな異なっており、私たちの組織がポジティブで有意義な変化をもたらすには、私たちの仕事が地域のニーズに根ざしている必要があるということです。Museums Change Livesのフレーズのように、博物館や美術館が実際に人々の生活や人生を変えられるとしたら、まず人々の生活や人生の一部になる必要があるといえるかもしれません。

この変化は今、英国のこのセクターで私たちが取り組んでいる仕事に反映されています。組織のあり方は、問題解決に役立つプログラムをトップダウン方式で作成することから、人々と共に社会課題の解決に取り組むものへと変化しています。このことは、博物館や美術館を、社会の仕組みや人々の生活の一部に組み込むことになります。博物館・美術館がより広範なエコシステムの中にあることで、その価値や我々が貢献できることについて考えをより深めることができます。それは、参加を阻むさまざまな障壁を打破することにもつながります。プロジェクトのテーマは、より良い住環境や労働環境の創出、健康や幸福感の向上、あるいは参加・討論・内省の奨励といったものになります。他方、それらの課題を結びつけ変革できるかどうかは、私たちが地域の社会課題にいかに取り組むかにかかっているのです。

そしてこの枠組みを通じて、私たちはダリッチ・ピクチャー・ギャラリーの仕事も考えています。地域との連携は、私たちのすべての活動に反映されています。私たちはロンドン南部の行政区であるサザーク、ランベス、ルイシャムの地域に根ざしています。私たちは、地域のパートナーと一緒に働くことで多様な意見を聞くことができ、地域社会のニーズに応えながらダイナミックに進化をとげることができます。このようにして地元でそのとき起こっていることを常に察知し、人々の生活で一番問題になっていることに積極的に取り組もうとしています。私たちを取り巻く世界は急速に変化しているため、組織は変化のスピードに合わせ迅速かつ柔軟に対応する必要があります。

近年は子ども・若者のメンタルヘルスの問題が全国で増加しており、コロナ禍によって悪化しています。2023年のNHS（国民保健サービス）のデータによれば、5月に専門医に緊急に紹介された18歳未満の患者は3,500人を超え、2019年の同月比の3倍にのぼっています。私たちの地元でもこうした全国的な問題は特に若者とさまざまな層に広まっています。私たちの地域社会では多くの子ども・若者にとってメンタルヘルスの支援を受けるのが難しい状態が続いており、しかも支援サービスの内容は必ずしも常に良好なわけではありません。その場しのぎの政策が、地域間の医療格差をさらに悪化させ、子ども・若者は一貫した支援を受けられていません。メンタルヘルスは、生活費の高騰と並び、長期欠席者（persistently absent）の子どもが増加している主要な要因の1つでもあります。イングランドの長期欠席生徒の割合は、2018～19年には10%でしたが、2022～23年には、全体の5分の1以上にあたる22.3%に増えています。

メンタルヘルスと若者の問題に関して、学校はまさに最前線にあります。学校は、児童・生徒のポジティブなメンタルヘルスと幸福感を高め、支援する上で重要な役割を果たします。しかし、こうした問題に対処するには、学校の資源は十分ではありません。私たちは地元の学校の教員と緊密に協力しており、この人間的なつながりは他のプロジェクトが進行中にも途切れることはありませんでした。教員からはロックダウン解除後の生徒の間で、不安やメンタルヘルスの悪化が広がっているとの指摘がありました。初等学校から中等学校への移行期は特に難しい時期だと指摘されていました。ある教員は、「アートを土台として幸福感やメンタルヘルスにアプローチする計画・促進方法について理解を深めたい」と語っていました。

翌年中等学校への進学を控える初等学校6年生の児童（10～11歳）について詳細に調べる中で、私たちはこの過程で学校が利用できる資源を評価することにしました。その結果、中等学校への進学準備で子どもたちを支援するための物質的な資源は多くあることが分かりましたが、この間の子どもたちの感情や幸福感をサポートする方法に焦点を絞ったものはほとんどありませんでした。

私たちはこの極めて重要な時期の支援不足に対応するためのプロジェクトを立ち上げることにしました。教員と協力し、私たちの収蔵作品を活用して生徒たちの幸福感の向上に役立てるよう、教員が自信を持って使えるツールを提供しました。このプロジェクトの包括的な目的は次の通りでした。

—— 当美術館の歴史的な芸術所蔵品を活用したさまざまな創作活動の展開を通して、レジリエ ンス（回復力）と幸福感を高めること。
—— 初等から中等への教育環境の移行に役立てることができる、マインドフルネス、リラクゼーション、創造的問題解決などの手法やツールを活用することにより、6年生の子どもたち（10 ～11歳）を支援すること。
—— 当美術館に関わっていない地元の学校を積極的に勧誘して、学校と当館のコレクションとのつ ながりをつくり、子どもたちに地元の文化資本である場所を紹介すること。

このプロジェクトは当館の「健康と幸福」の取り組みで学んだ知識や情報から生まれたものです。この取り組みは、医療・教育分野のパートナーと共働で行うことによって、アートと創造性を活用してメンタルヘルス、社会的孤立、慢性的な健康障害などの分野での成果の向上を支援し、ポジティブな幸福感を高めています。

【発表趣旨】

‘Mark Makers’は、どのように学校に関わり、そして教師・子どもたちはどのように変容したのか？

アレックス・ボウイ（英国）

Mark Makersは「幸福感（wellbeing）」を生む創造的なプロジェクトで、初等学校から中等学校に進学しようとしている11歳の子どもたちの支援を目的としています。このプロジェクトは、学校生活のこの段階の生徒を支援するための創造的な資源が不足しているという現場の教員の声に応え制作されました。コロナ禍の影響を受け、学校の子どもたち、とくに中等学校への進学を控えた子どもたちに対する懸念が拡大していました。NHS（国民保健サービス）のデータによれば、7～16歳の子どもたちの中で心の病を抱えていると思われる子どもの比率は2017年の9人に1人（12.1%）から2020年には6人に1人（16.7%）となりました。この比率はチ2020 ～22年の間も同程度で推移しています。

別の統計で見ると、2022年には7～16歳の5人に1人（19.9%）が前年に世帯収入の減少があった世帯の子どもであり、心の病を抱えていると思われる子どもではその比率は4人に1人（28.6%）になります。英国の学校における貧困レベルは、各学校でPupil Premiumの受給資格を持つ児童・生徒の比率を見ると分かります。英国の学校でPupil Premiumの受給資格を持つ子どもたちの比率は全国平均で1校当たり27.3%です。

私たちは学校と連携して、まず地元のサザーク行政区内の全初等学校の表を作成し、各学校のPupil Premium受給額を記録しました。それから最高比率（35～50%）を受給している学校を調べ、ダリッチ・ピクチャー・ギャラリーまでの移動に要する時間を地図に落とし込みました。そして、公共交通機関を利用して45分以下で当館に来ることができたにもかかわらず、学校の遠足で当館を訪れたことがなかった全ての学校にコンタクトをとりました。私たちは、当館を訪れる生徒たちを新規開拓したかったので、これまで当館を訪問したことのない学校に働きかけることにしました。

実際に各校の担当者に接触するのは非常に難しいことが分かりました。英国の学校は現在、厳しい予算削減、教員の燃え尽き症候群や過重労働に苦しんでいます。何回も電話をかけ、Eメールや追跡メールを送った結果、ついにしかるべき教員と連絡が取れ、面談の予約を確保しました。1回目のワークショップの実現後、教員の感謝の声が届いてからは、積極的に参加する教員が増えました。プロジェクト2年目は、1年目の実績と学校や生徒への効果が証明され、学校の参加がはるかに容易になりました。

Mark Makersのセッションは、私たちの学校プログラムに協力してくれるアーティストのチームが制作を担当しました。アーティストにはさまざまな創作活動のバックグラウンドがあり、「幸福感（wellbeing）」を支援するワークショップづくりに携わった経験がありました。私たちはまず、教員が生徒の中等学校への進学を支援するにあたり、教育・メンタルヘルスの慈善団体からどのような援助が受けられるのかを調べました。そこで気付いたのは、援助は非常に実用的で、中等学校への移行に伴うテクニカルな違い（新しい校舎、異なる時間割など）を概説している一方で、この時期の生徒の気持ちや、生徒のウェルビーイングをサポートするのに使えるクリエイティブなテクニックに着目したものはほとんどないということでした。

私たちは、皆が自分たちの人生で経験した移行期について考えることから、制作プロセスに着手しました。移行期に人が持つ感情としては、未知の世界に対する緊張感、興奮、恐れなどがあります。私たちはワークショップを、未知のものと遊ぶ、さまざまな方法で材料を使用する、といった実験的な手法を基本に据えたシリーズにできないかと考え、新企画の冊子を作成しました。

セッションは当館の「ゆっくり見る（slow looking）」活動から始まり、クロード・ロラン（1600 ～1682）の作品「ヤコブとラバンとその娘たちのいる風景」（1676年）を鑑賞しました。「ゆっくり見る」ことは世界中の多くの美術館で用いられている活動で、芸術鑑賞を心に残る時間にしてくれます。私たちは、作品の中のさまざまな要素をとりあげて、すみずみまで見て作品に没入させる瞑想への手引きに似た台本を作成し、子どもたちが鑑賞している間に語りかけました。こうして最初の「ゆっくり見る」プロセスが終わると、生徒たちはスタジオに移動し、ドローイングやペインティングから音楽やコラージュまで、感じたことを手で描いたり、テクスチャーを使って拓本を作ったりと、さまざまな創造的な経験についての指導を受けます。生徒たちは、最終的な結果を気にすることなく、今に意識を向け、その瞬間に没頭し、いろいろなことを試すよう奨励されました。私たちは、満足のいく結果を出せるよう上質の紙と材料を調達しました。紙は厚く多孔質で、水分や材料をたくさん重ねても破れないようなものにしました。

プロジェクトの結果には本当に興奮させられました。教員は、創造的な表現が奨励されるセッションを通じて、リフレッシュすることができました。「芸術が嫌いだった」生徒たちは、自分たちの作品が「正しい」かどうかを心配せずに試すことができ、その結果には驚かされることがしばしばでした。セッションで最も大切なのは、生徒たちが毎日の勉強漬けの生活から解放された時間の中で、自由に、何が起きるのかを試してみることです。このスキルこそ生徒たちにとって中等学校への進学やその後において間違いなく重要になるからです。

https://digital.nhs.uk/data-and-information/publications/statistical/mental-health-of-children-and-young-people-in-england/2022-follow-up-to-the-2017-survey

【発表趣旨】

文化芸術で認知症高齢者・家族をいかに支えるのか？

メレディス・ウォン（米国）

ケアリングカインドは、ニューヨーク市で有数のアルツハイマー病および認知症の介護専門団体です。40年以上の経験を有するこの団体はコミュニティのパートナーと手を結び、認知症の人々とその家族を支援するための情報やツール、トレーニングを提供しています。

10年以上前、当時はアルツハイマー協会のニューヨーク市支部だったケアリングカインドで、1人の認知症シニアトレーナーが、認知症の人々とその介護者である家族に芸術がもたらす影響について研究しました。それ以来connect2culture®は、認知症患者とその家族が生活の質を高めるためのプログラムについて学び、参加する拠り所となっています。文化団体にとっても、研修を通じて認知症についての知識を得るとともに、どうすれば入場者や参加者に包摂的で心地良く、かつ安全な環境とプログラムを確実に提供できるかを学べるというメリットがあります。ニューヨーク市でも全米でも、さまざまな能力を持った多様な人々が参加できるようなアクセシブルなプログラムが急速に広がっています。博物館などの文化団体は、コミュニティの福祉向上の恩恵を十分に受けていないさまざまな層の人々を引き込み、その影響力を拡大していこうとしています。社会的不平等、多様性と包摂性をめぐる話し合いをリードしている文化団体には、美術館や歴史博物館、植物園、パフォーミングアーツの団体などconnect2culture®の協力団体も含まれており、認知症に対する負のイメージの払拭と認知症の人々の能力についての意識向上に尽力しています。介護者である家族は、自分たちの経験を共有してくれる人々の支援を一層心強く感じています。

2022年現在、米国では650万人の人々が認知症を抱えながら生活しています。2020年には、ニューヨーク市だけでも、800万人超の人口のうち41万人が認知症患者でした。この数は2025年までに12%増加すると見込まれています。一方、アルツハイマー協会によれば、日本の人口約1億2,500万人のうち440万人が認知症患者であると推定されています。社会が高齢化するにつれ、認知症の患者数は増加するでしょう。科学者や研究者が治療薬を探している間にも、何百万人もの人々が日々の生活に困難を抱え、苛立ちと社会的孤立感を感じています。それは認知症とその介護コミュニティのすべての人にとって避けられません。芸術文化アクセスプログラムは、認知症患者とその介護にあたるすべての人に、一時の安らぎを提供します。

connect2culture®は、前向きな気持ちで孤立感や苛立ちと闘うことができるような、認知症に優しい活動や体験を探している米国内外の認知症家族にとっても、1つの拠り所となっています。ここでは、介護者である家族が、認知症患者とその介護者に関わるための特別の研修を受けた近隣の文化団体とつながることができます。ニューヨーク市では、2013年の近代美術館の「MoMAで自分に出会おう（Meet Me at MoMA）」プログラムを皮切りに、認知症に優しいプログラムが始まりました。それ以来、メトロポリタン美術館、ブルックリン美術館のような他の美術館も、参加者が、できないことではなく今できることをフルに生かせるような、インタラクティブな体験プログラムを生み出してきました。こうしたプログラムの目標は、知覚活動、会話、自己表現といった参加者の体験を導き、共有することです。博物館などの文化団体には、認知症の家族のニーズについて意識を高め、クオリティ・オブ・ライフを向上させ、人々が必要と感じるときは支援してもらえるようなコミュニティづくりをする力があります。

協力してくれる文化団体が増えていることから、connect2culture®では文化団体のネットワークを構築し、認知症コミュニティ特有のニーズに対応しているプログラムの評価を行っています。認知症を抱える人にとって、そうしたプログラムは社会的刺激を受け、自分たちの貢献が正当に評価され、そして人間性が認められる場を持てる機会です。家族にとっても同様です。家族の責任が重くなるにつれ、家族は社会的なつながりからこぼれ落ち、自分自身を支えるものがほとんどなくなってしまいます。家族が集まり、病院以外の場所で体験を共有し、社会的なつながりの場を持ち、アイデアやリソースを出し合い、支え合い共感し合えるネットワークを構築する機会を作ることは、認知症に関する固定概念を打破し、偏見を払拭するうえでの鍵となります。リンカーン・センターの「リンカーン・センターの素晴らしいひと時（Lincoln Center Moments）」やルービン美術館の「介護者を力づける（Empowering Caregivers）」のようなプログラムは、文化芸術プログラムが、探求的・想像的な活動を通じて、認知症と共に生きる家族の絆を強めたり復活させたりするチャンスを提供するものであることを証明しています。「リンカーン・センターの素晴らしいひと時（Lincoln Center Moments）」は、パフォーマンスやインタラクティブなワークショップを通じて、認知症とともに生きる人たち向けに、多分野にまたがるプログラムを提供しています。「介護者を力づける（Empowering Caregivers）」はルービン美術館の介護者専用プログラムで、介護者が気軽な会話を通して互いに学び合い、支え合う心身の癒しの場を提供します。

12

【事後アンケート】

質 問　以下の❶～❺について、感想（気づきや発見、勇気づけられたことなど）をお聞かせください

❶ 英国、ジェーン・フィンドレーさんの事例報告

＊漠然と、博物館しかり英国の学校制度や教育手法は先進的な印象をもっていたので、学校や教員を取り巻く環境は非常に日本と近しいものがあることが意外でした。当初、今回聞ける話も日本に置き換えて検討が必要になるだろうと予想していましたが、その必要があまりなく非常にためになりました。

＊英国においても、なんらかの事情で学校に行けない子どもが多いという事実を知り驚きました。
英国と日本では何が同じで何が異なるのか、しかし、結果として、子どもの不登校を年々増加させていることを、真剣に考えなければならない、と気付かされました。
ターゲットを“transition”の子どもたちに見定めて活動されていらっしゃることも参考になりました。
日本でも「○○の壁」という言葉は多く見受けられますが、そうした成長過程相応のプログラムを用意していくべきだ、と意識を向けるきっかけにもなりました。

＊気になったキーワード：Social impact
美術館が人々の生活や人生の一部になる必要があるということ、単発ではなく一貫した支援が必要なことは、対象（若年層・高齢者）を問わず共通課題だと思いました。
学校における人的・物的リソース不足は、日本の学校現場もまた同じことで、美術館、博物館にそれを補うポテンシャルがあることは間違いないと感じました。

＊気になった言葉：「地域のニーズに根ざしている必要がある」
美術館は社会のなかにあり、その地域の人たちが集まり、アートを楽しみ、そして、アートを活用しながら地域の課題や問題をともに解決する場所であるはずです。特に、地方の公立美術館は「地域と共にあるべき」「地域に寄り添う」ことが重要と考えます。
しかし、日本の美術館は今も「展覧会」に動員することが中心の関心事であり、来場者の数が評価の指針になっています。急には変えられないかもしれませんが、海外のこうした事例がそのあと押しをしてくれるのではないかと思いました。

＊そもそも、英国の学校教育制度や格差について、全くと言っていいほど知らなかったこともありましたが、中等教育への移行問題や親の年収による子どもへの影響など、日本と同じ問題を抱えていることが印象的でした。その中でミュージアムとしてコレクションを活用することで、子どもたちのみならず、教員のウェルビーイングにつなげていくという試みは、興味深いものでした。

❷ 英国、アレックス・ボウイさんの事例報告

＊どのようなアプローチか興味がありましたが、創造的作業（実験）を通して、正解不正解以外の考えもある、それを自らの体験を通して得られるプログラムで、決して押しつけがましくないのがよいと思いました。二次成長期のネガティブに振れやすい時期に、自己肯定感を持てる経験をすることによる、長期的な影響や成果を今後も知りたいです。

＊アレックスさんが取り組まれたワークショップの様子を知り、「私も参加したい」と率直に思う魅力的なプログラムに思いました。自分らしさを追究するスタイルは、「自分が好きなことは○○だったんだ」というような気づきに始まり、子どもたちに自信と、生活を豊かにしていくヒントを自分自身で見出せるようなきっかけを提供するように思います。
アレックスさんのワークショップに参加した子どもたちの感想に、目頭が熱くなりました。

＊気になったキーワード：Slow looking
未知の世界に対する緊張感や恐れを取り除く第一歩として、対話型鑑賞が有効だという報告は、とても心強いものでした。作品への没入を促す「語り」は、鑑賞者の自発的な気づきを邪魔するのではないかと思いましたが、実際にアレックスさんの語りを聴いて、それが杞憂であることを体感的に理解できました。
Mark Makers が興味深く、特にTransition（移行期）をとらえるという考え方が新鮮でした。

＊ダリッチでの実際の活動の中で、slow lookingという鑑賞方法は初めて聞きました。実際に時間や価値観に縛られない鑑賞の仕方が子どもたちの心の問題にも、さらには教員側にも有効だということが印象的でした。私の所属している博物館は自然史系資料が中心ですが、骨格や剥製の中には美しさ・穏やかさを見る人が実感できるものも多くあります。ぜひ参考にしたい鑑賞方法だと思いました。

＊気になったワード：「ゆっくり見る（Slow looking）」
「よく見てみよう」と解説の時には言うが、「ゆっくり見てみよう」とは言ったことがありませんでした。「よく見てみよう」はどこか強制的に何かを見つけさせるような言葉のように思えていたが、「ゆっくり見てみよう」は、緊張感なく、好きなように見たいところを見ればよい、という緩やかな感じがする表現だと思いました。

＊気になった言葉：「高品質のものを使うと見栄えが違う。素材は重要」
子ども向けのイベントでは、比較的安価なものを材料に使うことが多いです。しかし、「高品質のもの」を使うことで、色合いや質感がよくなります。子どものときの体験だからこそ高品質のものを使うべきである、というのは重要だと思いました。
また、高品質なものに触れることによって「物を大事にする」気持ちも生まれるのではないだろうかと思いました。

❸ 米国、メレディス・ウォンさんの事例報告

＊博物館が認知症患者や関係者にできることは、回想法だけではないと知ることができました。認知症患者や親の介護をしている人たちは本当に大変だし、気分転換するのも気が引けたり、気分転換中も気がかりだったり、近くに共有できる人がいなかったりします。そのため、彼らが参加しやすいワークショップは、ニーズが非常に大きいと思います。近い境遇の人と、病院以外でポジティブな共通の体験をした者同士として知り合えるのも、とてもいいと思います。介護者が気兼ねなく外出できる機会を作れる、今現在介護中の知り合いを作れる場となれる、文化施設開催だと怪しい集まりでもなさそうに感じてもらえるなど、文化施設のもつポテンシャルに改めて気づかされました。

＊本当に多種多様な方々とコラボレーションを展開されていて、今のこの世の中に求められている社会活動のあり方だと思いました。色々な刺激が提供できること、というのは、博物館も多様な方々にご利用いただくべく取り組むことと思っています。メルディスさんのご活動に励みをいただき、自分も頑張ろうと思います。

＊気になったキーワード：Access Educator
地域社会・市民と美術館・博物館等を結びつけるためのコーディネーターという役割が、20年以上も前から職種として存在している米国の先進性を感じました。
「介護者の支援」という視点に、まず学芸員が元気であることを目指した、九州産業大学が実施しているオンライン「語り場」の理念に通じるものを感じました。

＊認知症を患う本人だけでなく、介護する家族を支える、支え合う場所として、病院以外の場所が大切であるという言葉に共感しました。アートには社会的なつながりをつくり、また認知症とともに生きる力を生み出すきっかけを提供できる可能性を知る事例を伺えたと思います。

＊認知症患者とその介護者への「プレッシャー」を減らす意

【事後アンケート】

味での博物館や文化芸術の活用の中で、「参画している」という意識の重要性をおっしゃっていたことが印象的でした。音楽・芸術、さらには生き物の標本であっても触れることで、患者自身の体験へと結びつき、認知症の進行を遅らせたり、改善に向かわせたりする力を知ることができました。

4 質疑応答（ジェーンさん、アレックスさん、メレディスさんの回答など）

＊忙しい中でも、コミュニケーションを密に取ることを念頭に置いておくことが大事であることを再認識しました。

＊「Slow looking」を行いやすい場所の選定も大事で、展示室に長時間滞在しても、他の観覧者の邪魔にならない区画で行っていることを知りました。

＊「Slow looking」は、スロークッキングからきているという話を聞けたのは理解しやすく、ただ時間をかけてみるだけじゃないことがよく分かりました。また、実際にアレックスさんの語り掛けで、「Slow looking」を少し体験できて、自分ならどうできるだろうと考えやすかったです。

＊英国事例ではプロジェクト実施にあたって、地域を選別し個別にアプローチをかけている、成果報告は出資関係者別にまとめるなど、日本との違いに、資金の出どころの違いを強く感じました。日本の公立博物館は、公正にするため一定地域に一斉募集をかけて反応の有無に対しては受け身、可能な館は校長会などで全体へアピールする、それで業務上精一杯で個別営業活動のようなことはできていない状況だと思います。英国事例のような取り組みも、非常に大切で取り組んでいきたいですが、どのように導入していけるのか、検討と議論が必要だと感じました。

＊アレックスさんのワークショップを体験でき、その内容が印象的に脳裏に焼き付いています。瞑想の時間のように、気持ちよく美術鑑賞の入り口へと誘導いただいた気分でした。その後、実際「自分でも絵を描いてみたい、下手でも」として好奇心を掻き立てることができました。

＊組織として持っている課題（人事・予算など）は、国に関わらず、多かれ少なかれ共通するものだと思いました。私自身は個人で動いているからこそ、フットワーク良く動ける部分もあるという思いを新たにしました。

＊協働し、信頼を生み出し、関係を構築していくという「Collaboration 連携」の重要性を学びました。

＊「できることを考えていく。今ある時間で考えてみる。」（メレディスさんの意図されたことと、異なる解釈になるかもしれないが）まず一歩を踏みだし、仲間を見つけ積み重ねていくことが大事だということを学びました。また、無理をせず、一歩一歩進むことで先が見えてくるのだろう、と思いました。

＊三人の質疑応答では、特にこのようなプログラムをどうやって周知し、援助やフォローを受けるのかという部分が興味深かったです。地域のニーズを知り、地域の課題に答えていく形での活動は，国・館種問わずに必要なポイントだと思います。連携についても、相手をまずよく知ること、コミュニケーションをクリアにしていくことなど、我々の活動でも活用できる話を多く知ることができ、私にとって充実した内容でした。

5 今回の国際シンポジウムをもとに、今後自分たちの活動で取り組んでみたいこと

＊介護者向けのワークショップは実施内容さえ決めれば、募集方法や会場、人員など従来通りイベントをするイメージで行えそうだと感じました。おっしゃっていたように、少人数に区切るのは大事だと思います。人数制限ありで事前予約制、当日キャンセルでも大丈夫にして行うなど、枠組みは取り入れやすそうで、人員を多めに確保できれば、来年度実施も可能ではないかと感じました。

＊Mark Makersのようなプログラムをやってみたいですが、博物館でどのように取り組めるか自分の中にアイデアがまだ浮かばないので、身近にあるコミュニティやこれまで活用していなかった資料などで引き続き考えていきたいと思います。

＊現在、多様な方々とともに作る博物館を目指し、まずは自分からアプローチすべき、として意識的に活動しています。まだ、ご縁をいただいたところから、という手探りの状態で、良いことばかりではなく辛いこともありますが、その過程に学ばせていただくことも多く、一つのやりがいにもなっているように思います。自分自身のウェルビーイングも忘れないようにして、皆様方と常に成長し続ける形を目指していきたいと思います。

＊Access Educatorの役割に、可能性を感じました。アート・エデュケーター兼アクセス・エデュケーターとして、地域・個人と美術館博物館サービスをつなぐ仕事を提供したいと思いました。

＊まずは、自然史資料を「ゆっくり見る」機会を作ってみたいと思います。さらに自然史のみならず、当館の近くにある美術館や動植物園と協働し、子どもたちだけでなく、学校教員の心の快復のために活用いただける博物館を目指したいと思います。

＊当館は小学校を中心に校外学習や遠足での利用を受け入れている。しかしながら、当館から積極的に働きかけて利用してもらうのではなく、学校からの希望があって初めて利用されているのが実態です。展示解説や鑑賞教室も希望があれば対応しているが、そもそもそのような対応ができると認識していない学校も多いと感じています。まずは学校の教員向けに美術館でどのようなことができるのかを周知し、次のステップとしては学校と連携して、各校のニーズにあわせたプログラムを一緒に作っていくようなことができればと思います。